
Fate/Love & Peace

フリスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate / Love & Peace

【ノード】

N2425Q

【作者名】

フリースタ

【あらすじ】

8人目のサーヴァントとして召喚された優男。

それは存在しないはずの【ガンナー】だった。

【ヒューマノイド・タイフーン】と恐れられた伝説の賞金首ヴァッシュ・ザ・スタンピードがFateの世界を駆け巡る！？

コレは『Fate/stay night』と『TRIGUN』の
二次創作です。

ヴァッシュのサーヴァント能力表（前書き）

テキトーと言えばテキトー

ヴァッシュのサーヴァント能力表

【クラス】

ガンナー

【マスター】

バゼット・フラガ・マクレミッシュ

【真名】

ヴァッシュ・ザ・スタンピード

【二つ目】

ヒューマノイド・タイフーン

【属性】

中立・善

【筋力】	B	【魔力】	
【耐久】	C	【幸運】	
【敏捷】	A	【宝具】	

S E E

【保有スキル】

不殺 : A +

呪いクラス。敵味方問わず殺さずを貫く。

騎乗 : E

乗れなくはないが、下手くそ。

無限の弾丸

マスターとのパスが繋がっている限り、スピードローダに勝手に補充される。弾切れを起こさない。

単独行動 : A +

パスが繋がってるだけで、魔力供給とかがほとんど無い。消費もほとんど無いため、例え契約が切れてもあまり問題ない。

【宝具】

ヴァッショの銃（銀）・ナイブズの銃（黒）

ランク : B

対人宝具

レンジ：1～10

最大捕捉：1

かなり重厚なリボルバー式拳銃。マグナム以上の威力があり、銃を使う者でもかなり重く感じる。過去に照準が大幅にズレるなどがあったが、シリンドラーの交換などにより。修理済み。

隠し銃

ランク：B

対人宝具

レンジ：1～5

最大捕捉：3

左腕は義手。普段は普通の手にしか見えないが、それが高威力なサブマシンガンに変形する。

プラント

ランク：A

対人宝具

レンジ：1

最大捕捉：1

人外の戦闘能力、身体能力、射撃技術と呼ば抜けた反射神経、しぶとさを持ち、随所で人間を遥かに超えた能力を見せる。その正体は、突然変異によつて生まれたプラントの「自立種」……つまり純粹な

人間ではない。

エンジエル・アーム

ランク：EX

対軍宝具

レンジ：1メートル

最大捕捉：1メートル

身体と同化して放つ銃による砲撃。これが月に穴を開けたモノ。砲撃で月に着弾した際は肉眼ではつきりと確認できるほどの巨大なクラスターができ、地表近くで爆発しただけで数百万人の大都市を消失した程の威力を出した。

第01話 「ガンナー」（前書き）

ノリで書き始めました。

予定してなかつた新作に作者自身が驚いてます。

予定している新作はまたちゃんと書きます。w
こつちはのんびり気分で書いていきます。

ヴァッシュ知ってる人いるかな？ 作者はヴァッシュが大好きだ！！
ちなみにこの小説、アニメ版【TRIGUN】の終わつた後を想定
して考えてますので、ウルフウッドさんは出できません！！ ウル
フウッドファンの方は「ゴメンナサイ！！」

第01話 「ガンナー」

（「こ」は……？ 僕は確かにナイブズと戦つて、街に連れ帰つて……）

街の宿で、疲れ眠つていたはずの金髪の男。

目が覚めて気がついた時は暗闇の中。

視界が急に明るくなる。そこは砂漠だった。

太陽は照りつけ、汗が滲む。

この砂漠に何もないのか？ と思えばそうでもない。

地面には廃墟と化した建物と思われる残骸が埋もれて見えている。

（「ほ、僕がやつたのか……？」）

『いいえ、違います』

目の前に現れたのは聖職者の格好をした女人。しかし、実態ではない透けた姿をしている。

『「こ」はあなたの記憶に残るモノを集約した世界。現実ではありません。あなたは選ばれたのです。ヒューマノイド・タイフーン』

一陣の強い風が吹く。

熱砂にはためく赤いコート。都市を灰に変える悪魔の使い。

ヒューマノイド・タイフーンの異名を持つ伝説の賞金首。その額 600 億 \$\$。

人の身でありながら、人類初の局地災害指定となつた伝説の男。その名はヴァッシュ・ザ・スタンピード。

笄のようになにに逆立てた金髪がトレードマークで、左耳には金色のピアスが輝いている。過去に数千万人規模の大都市ジュライを一瞬の内に消し去り、巨岩の都市を消し飛ばし、月に地上から確認出来るほどの巨大な穴を穿つた人物だ。

(選ばれた？ 僕が……何に？ 聖杯戦争？ なんだ？ 頭の中に情報が流れ込んでくる)

『聖杯戦争は、聖杯によつて選ばれた七人のマスターが、サーヴァントと呼ばれる聖杯戦争のための特殊な使い魔を使役して戦いあう形をとる。あなたはそのサーヴァントに選ばれました。最後の一人になるまで戦い抜き、サーヴァントの魂を聖杯に捧げた時、願いは叶います』

(願い……僕には願いなんて……)

『でも、選ばれちゃいましたから』

急にラフな感じの口調になる女人。

(「、断つたりとかは……？」)

『出来ませ～ん。イヤなら召喚された瞬間に自殺してくださいまし』

（自殺？ それは僕が一番嫌いな行為だ……）

突然、ヴァッシュの足元が白い光に包まれる。

『強制召喚されましたね。頑張つてください。あなたのクラスはガンナーです。8人目のサーヴァントさん。あ、そういうコレを持つ行くと良いわ。必要なモノが入ってるから』

（説明は頭に入つたけど『ガンナー』なんてサーヴァントはいなかつたああああ～～～……）

叫びながらもヴァッシュと一緒に投げ込まれたカバンは光の中へと消えて行つた。
ある意味、奈落の底に引きずり込まれたと言つても良いかもしだい。

「执行者」だ。そして、今回の聖杯戦争ではランサーの本来のマスター。そり、ランサーのマスター“だつた”。バゼットは聖杯戦争の監督者である言峰綺礼に協力を求めるが、騙し討ちにあって左腕ごと令呪を奪われ、今はマスターでは無い。既に瀕死の状態となっている彼女は、生きる事を諦める直前であった。

そこへ白い魔法陣が浮かび上がる。召喚の魔法陣だ。しかし起動させた者は誰もいない。では、一体誰が？ それはバゼットの血であった。自覚も無く、意識も消えかけそうな彼女から流れ出る血がソレを喰んでいた。

薄れゆく意識の中で彼女は赤いコードを見た。

ヴァッシュは召喚された。目の前にはマスターと呼ばれる人物がいる。召喚者だと、マスターだと、身体の奥底で認識する。しかし、マスターは血まみれだ。左腕が無い。

「はああああ！？ えらいこいつやーー！ 止血するものーー！」

「ゴンッ

頭に落ちてきたのは大きめのカバンだ。召喚される直前に一緒に投げ込まれたモノだ。

「いたたたたあ～……くう～使えるモノ入つててくださいよお～？」

カバンの中には左腕が入つていた。義手とかではなく、生身の腕が入つていたのだ。

「……えええ～……でも状況的にコレしかないんだよな～……お願いしますよ～？」

左腕をスー^ツ姿の女性にあてがつ、それに包帯で固定をしようとすると、腕が光り出す。

「な、何ですと～！？」

光が收まると腕は接合していた。水たまりの様に広がっていた血も無い。

「……う？ 」「は？」

「ほわあああああ～」

ヴァッシュは起き上がる女性マスターを見て手を祈る様に組み、歓喜の声を上げた。……無事助かったという点もあるが、脳内のほとんどは綺麗な女性だったからという理由が占めていた。

「あ、あなたは？」

「ども、サーヴァントのガンナーです。マスターのお名前は～？」

「ま、マスター？ 私はランサーの……まつランサー……高峰……いや、しかし腕が……失礼ですが、私の腕はどの様に？」

まだマスターと呼ばれる事に疑問を覚えるバゼットは田の前の赤いコートの優男に礼儀正しく質問をした。

「いや～流石はマスターです。腕を添えたら勝手にくつつこうやうんですもん。無事でよかったですマスター。で、お名前は？」

「くついた？ 私にそんな力は……つー？」

そして、バゼットは少しばかり落ち着きを取り戻したのか、目の前の優男とパスが繋がつていてる事に気がついた。

「ほ、本当にサーヴァントなのですか？」

「ヴァッシュ・ザ・スタンペードと言こますー！ め近づきのしるしに熱い口付けをー！」

「け、結構ですー！ しかし……危ない所を助けてもらつたようだ……私はバゼット・フラガ・マクレミッシュ。……あなたのマスター」という事でよろしくのですね？」

「バゼットがやんかあ～よろしく～」

「バゼットちやん！？ ……ンンシ！～ よろしくお願ひします。ヴァッシュ。ですが、あなたは先ほど聞き慣れない事を言いました。ガンナー 何て聞いた事がありません」

「僕もそう思つたさー。でもきっと運命だつたんだよ。僕とバゼットちゃんが出会つのは運命だつたのさー」

駄目だ。会話が成立していない。バゼットは額に手をあて、軽い優男から視線をすらす。そこにはカバンがあつた。

「ヴァッシュ。コレはなんですか？」

「ああ、何だらうね～？　コレは……」

カバンの中に入っていたのは、ヴァッシュの「ゴツいリボルバー式の銃とお揃いのナイブズの黒い銃、そして、スピードローダー（ ）と数種類の弾だつた。

スピードローダー・リボルバー式の拳銃に一発一発、弾を手で込めるのではなく、一気に6発補充できるリロードの器具。

「本当にガンナーなんですか……では早速、あなたの力を見せてもらいましょうか。他のサーヴァントの位置を探つてください」

「あ、それ無理。僕戦いたくないもん」

「いや、無いもんつて、サーヴァントでしょう！？　あなたも叶えたい願いがあつて召喚されたのでは！？」

「生きているのに殺し合つなんて駄目だつて、この世はlove & peace だよ。バゼットちゃん」

「……ならば、私だけでも行きます！…」

「 ちよつ！ バゼットちゃん！ ？」

「 ふう仕方ないかな……聖杯戦争か」

バゼットが部屋を後にしたのを見送り、ヴァッシュはその軽い表情を変えた。サーヴァントとして召喚された以上ヴァッシュも理解はしていた。聖杯戦争。とどのつまり殺し合いだ。ナイブズの黒い銃を左手に持ち、ヴァッシュは重く何かを思い出していた。

「 ……でも、やつぱり殺したくないし、誰かが死ぬのは嫌だ」

ヴァッシュはマスターであるバゼットの気配を追う事にした。

夜の街。

どこへ行つても人はおらず、探しても人はいない。

バゼットは焦つていた。

監督者である者に殺された事もあって、自分の実力でこの戦いを行きぬけるのかと。ランサーを失い、幸運にも生き残った自分が、また何の奇跡なのか、聞いた事も無い『ガンナー』というサーヴァントを得た。力量は分からない。ヴァッシュ・ザ・スタンピードという名前も聞いた事が無い。英靈である事は間違いないが、いつの時代のどんな英靈なのか？ ガンマンの英靈、実力は不明。分かつている事は一つ、その英靈に戦う気が無いと言つ事だ。

橋を越えたところで、バゼットはその日の行動を終了する事にした。収穫は何もない。体調もまだ万全とは言えない。バゼットは来た道

を返すことにした。

「あ~いたいた~バゼットちや~ん 」

「ガラシシコ……どひしたのです？ 戰ひ気はないのでしょうか？……ですが戦ひ時は令呪を使用してでも戦わせますからね」

「うわ~ 嫌だなそれ。とりあえず聖杯戦争は切り抜けようと思つてね」

「やる気になつたと聞ひのですか？」

「穢と平和の為に……」

何を言つてゐるんだこのカーヴァントは……バゼットはやつ思いつつ、戻る事にした。とりあえず、この英靈の事を調べてみようと決意したのだ。焦つてまた死にかけても問題だと考え、今は冷静に今の状況、戦力を調べることにした。

第01話 「ガンナー」（後書き）

感想は隨時受付中ですが、あまり虚めないでください

Love & Peace!!!

第02話 「真名」（前書き）

あ、そう言えば能力値書いてなかつたな。
書くか。

第02話 「真名」

冬木市では最近、ガス漏れ事件に通り魔事件と、夜は本当に人通りが少なくなる。

赤いコートのお気楽で優男のサーヴァント、不殺を心に決め込むヴァンシュは、その事件が起きそうな時には毎回同じ気配を感じていた。

しかし

「今回も空振りですか……戦いたくないからと言つて、わざと遅れて気が付いたふりをしてるんじゃないでしょうね？」

「誤解だ！ 相手が引き揚げるのが早すぎるんだ。でも多分本人は来てない……」

「使い魔だとでも言つのですか？ だとしたら……キャスター」

魔術師のサーヴァント【キャスター】

ヴァンシュの勘、バゼットの推理は合つていた。

しかし、掴みきれないでいる。

「仕方ありません。しかし、今日もあなたの銃の弾に魔力を込めるだけになりそうですね」

「別に良いよお？ 戦うわけじゃあるまいし」

「何か言いましたか？」

「……何も（おおへ怖つ）」

そのままその先の事は何も掴めなこまま、田は過ぎて行つた。

時は経ち、穂群原学園。

学園と言つても学園としては機能していない。何故なら今は夜で先生も生徒も帰つてゐるからだ。しかし、校庭には青と赤の光が剣戟を以つて、その存在を誇示する。

「てめえどこの英雄だ！ 二刀使いの『兵など聞いた事がねえぞお！」

「ふん、そういう君は分かりやすいな。これほどの槍使いはただ一人」

青いルーンの加護を受けた服に身を包み見事に紅い槍を自在に操るのがランサーのサーヴァント。それに対峙するのが赤い服装の二刀の短剣を手に変幻自在の槍を防ぐ男がランサーの言つとおり、弓兵、アーチャーのサーヴァントである。

それを観察している人影が4つある。

一つは校庭内におり、女子学生の制服に身を包むアーチャーのマスターである遠坂 凜。

一つは校庭をフェンスで挟むよつた形で偶然と事件に遭遇した男子学生である衛富士郎。

そして、その対角線上に位置する茂みにいる2つ、ヴァッシュとバ

ゼットだ。

「ランサー……」

「バゼットちゃんの前のサーヴァントだね。つていうか赤い服の人、僕と被つてるんだよね。僕の方が良い男だけぞ」

「……いずれにせよチャンスです。ここで叩きます」

「叩きませんってば」

「な、何ですか！？」

大きな声だった。これが「聞こえませんでした」と言う人はいないだろう。

「誰だ！？」

「ああ、バレちゃつたじゃない。バゼットちゃんが大きな声出すから～」

「バゼット……！」

「くつ！ 仕方ありませんね。ガンナー、あなたの力、ここで見せなさい！」

「ぼ、僕つかあ！？」

「サーヴァントでしょうが！..」

アーチャーとそのマスターは新たに現れたサーヴァントとマスターを前に、様子見を始めた。

「また赤いやつか、流行ってるのか？……まあいい、やる気が無いようだが……その気こせせてやるよおーー！」

青い砲台から飛んでくる赤い線がヴァッシュコに襲いかかる。ヴァッシュコはオレンジ色のレンズのメガネを掛け、その線を途中で止めた。

「ドンドンドンッ！！」

3発の銃声だった。

「拳銃！？ アイツ何のサーヴァントなのよー？」

「凛、少し離れるで」

凛はアーチャーの言葉に従い、アーチャーの言つた安全圏まで下がった。

そして、考え始める。拳銃使いのサーヴァント。クラスで言つてアーチャーになりそうなものだが、アーチャーは自分のすぐ真横にいる。

では、キャスター？ いや、キャスターならこんな近くまで来て戦闘するとは考えにしない。

では、バーサーカー？……じゃないのは一目で分かる。

では、自分が召喚出来なかつたセイバー？ 銃を使っておいて？

では、アサシン？……シッククリくる氣もするが、あの目立つ格好で、しかも大きな銃声で

アサシンというのも違和感が残る。それにアサシンなら暗殺だろうから目立つて行動もしないか……特殊なアサシンの可能性もあるが。

では、ライダー？ 騎乗している物や、出来やうなものは見当たらぬいが、現状の可能性として一番高い気がする。

「アーチャーどう思ひう？」

「ライダーの可能性が高いか……しかし、銃を使うサーヴァントかボンドでも次元でもなさそつだが……」

何で「イツの口からそんな名前が出てくるのだろう」という疑問はその時は浮かんでこなかつた。しかし、拳銃で英雄とも言える様な有名人というのも難しいものだ。というか魔術師である以上、詳しくも無い。

とにかく見ているしかない状況であった。

「チツ！ 銃か……」

サーヴァントとして召喚される以上、召喚された世界の事は大まかに頭にインプットされる。銃という知識も少ないながらもあるのだが、戦うとなると別の話だ。

「あの～止めにしません？ ほら、死んじゃつたら大変ですし！」

「……バカかお前？ 死ぬのが怖くて参加してる奴なんていねえんだよ！！」

青い槍使いは止まらない。

しかし、ヒトヒトくヴァッシュはその槍を撃ち、攻撃の手を止める。弾をリロードするも、その速さに隙は生まれない。

ランサーは苛立つ、攻めきれない事もそうだが、何よりも殺す氣でやつてないのに苛立つ。どの弾道も槍自身に向かってくる。使い手である本人を狙つて来ない事が、苛立ちを加速させて行つた。

「てめえ……ふざけるのも大概にしちよお！！」

パキッ

その時、枝を踏み折る音が聞こえた。一同が視線をそちらに向けると、男子学生である傍観者の衛富士郎がそこにいた。見つかった男子学生はすぐさま逃げ始めた。

「誰だ！」

「しまつた、まだ学校に人が残つていたなんて！！」

アーチャーのマスターの声がヴァッシュまで届いてくる。

【聖杯戦争出場者以外の無関係者や一般人に見られた場合は、
捷により速やかに口を封じ抹殺しなければならない】

そのルールが頭に浮かびあがつた瞬間、ランサーはヴァッシュュへの
攻撃を止め、男子学生を追つた。

「くつー！」

ヴァッシュュはそれを追う、アーチャーのマスターも追つてくるが、
敵対というわけではないようだ。といつも、あまつさえ質問をして
きた。

「あなた、何のサーヴァントなの？」

「ガンナー、何故倒さずに一緒に行くのですか？」

「凛、敵である者に不用意に近づくのは贅同出来ぬのだが……」

「君、僕と被つてゐるんだよ！ 服の色を変えて出直して来てよねえ
！」

こんな時でさえ、ヴァッシュュは軽口を止めない。そして、会話もじりえ
やじりやだ。

「あらアーチャー、このサーヴァントのさつきの戦い方を見て、こ
の場で殺し合つと思つてゐる？ それに銃使いのサーヴァントなんて
聞いた事が無いわ？ あなたはライダー？」

「僕は乗り物苦手なの、一応【ガンナー】ってクラスらしいんだけ
ど？」

「ガンナ～？」聞いた事が無いわ……真名は？」

「真名？ 何それえ？」

「ガンナー！ 敵と慣れ合つのは止めなさい！」

「凛、ストレートに聞いても無駄だと思うが……しかし、私と同じ記憶が無いのか？」

「名前よ、あなたの名前」

「僕の名前はヴァン・ザ・スタンピードおー！」

— 1 —

…答えた。

「何を当然かの様に答えてるんですか！？」

バゼットは手袋を嵌めた拳を惜しみなくヴァッショの頭に入れまく

「あ痛アッ！－！」めんなさい－！」めんなさい－！」

「何なのよあんた達……でも聞いた事が無いわ……アーチャーは?」

「私も聞いた事が無いな」

そして、ランサーの気配を追つて、階段を駆け上り、角を曲がつたところに男学生は見つかった。既に死んでしまった状態で。

「…………アンタなのよ。」

アーチャーのマスターの凛と呼ばれる女の子はこの巻き込まれた少年を知つてゐるようだ。

「ガンナー、ここにはもう用はありません、行きますよ。ガンナー？ なつ！？ 泣いてるのですか？」

「だつてまだ若いのに……巻き込まれただけなのに……」

「随分と変わつたサーヴァントの様だ……凛、私はランサーを追つ、マスターの居場所ぐらいは知りたいからな」

「ええ」

「待ちなさい」アーチャーのサーバント。マスターだけを置いていくつもりですか？ このガンナーならともかく、私ならあなたのマスターを殺しますよ？ 安心しすぎではないですか？」

それはそうだ。雰囲気に飲まれすぎだろ？。

「しかし、ここまで手を出して来なかつた礼代わりです。ランサーのマスターの居場所なら知つています」

「えつ！？」 「何だと！？」

「ランサーのマスターは教会にいます」

「リタイアしたとでも言つのか？」

「いえ、マスターは言峰綺礼です」

「「なつー？」」

「では、私達はこれで失礼します。行きますよガンナー」

「綺礼がランサーのマスター？」

「……凛、深く考えるな。ヤツ等も敵だと言つ事を忘れるな。嘘の情報の可能性が高い。もし本当だとして、ヤツ等が乗り込まないのが不思議だ」

「わ、分かつてゐるわよ。い、今はそんな事より！」

凛は魔力を溜め続けたとつておきのペンドントを外し、衛富士郎を蘇生させ始めた。

「全く、君は無駄な事をしているぞ、大事な魔力の宝石を……」

「いいから黙つてアーチャー！ 集中できない！」

その日、マスターは8人目が現れ、
サーヴァントもまた8人目が確認された。

第02話 「真名」（後書き）

感想は隨時受付中。

第03話 「休戦協定」（前書き）

言つて忘れてましたが、シリアス成分かなり薄めで提供いたしております。

ギャグ路線が強めですね。だって作者がフリスタですからw

第03話 「休戦協定」

遠坂凜は目の前の何も知らない8人目のマスターと共に言峰教会に来ていた。ガンナーのマスターが言つには、言峰綺礼はラブンサーのマスターだと言つ事だが……。

「どうしたんだよ、遠坂？」

「何でもないわ」

遠坂凜はいつも通りにしようと考えた。手札のアーチャーはない。隣にいる衛富士郎は何も知らない素人以下。もし、言峰がマスターだとしたら、ここでバッドエンドになる可能性が高いからだ。

教会ではいつも通りの言峰綺礼がいる。見える肌に令呪は見えないが、顔以外には手の平と甲ぐらいしか見えないため、「マスターではない」と判断するのも早計だった。

衛富士郎と言峰綺礼の会話は終わる。

遠坂凜は、とりあえずの疑問を晴らすこととした。

「綺礼。ガンナーって呼ばれるサーヴァントに心当たりは？　その名の通り拳銃を使うんだけど？」

「ふむ、私も今回の例は初めてだ。聞いたことが無い。それに銃を使うサーヴァント……忌々しい」

何か銃使いで嫌な思い出もあるのだろうか？

まあ、魔術師なら拳銃などは忌み嫌うか、と 凜は気にしなかつた。

「脱落したマスターは？」

「今のところいないな。そのガンナーと呼ばれるサーヴァントを含めて8人だ。……イレギュラーではあるが、これによつて質の良い聖杯になる事を願うだけだな。とりあえず……喜べ少年。君の願いは、ようやく叶う」

初めての戦闘から数日が経過していた。

他のサーヴァントにも出会わず、戦わずにいる者がいる。

サーヴァントのクラスで表すとイレギュラーな存在。

ガンナーである彼の名前はヴァッシュ・ザ・スタンピード。

彼のマスターであるバゼットは基本的に夜型だ。

ヴァッシュはどちらでも行けるのだが、

マスターがこうだと午前中、午後はほとんど動けない。……のだが。

ヴァッシュは眞面目な顔をして誰に言つてもなく呟いた。

「いけない……ドーナツ分が足りない。今行こう。すぐ行こう

！」

彼はアジトにしている洋館から一人出歩き始めた。

お昼の3時を過ぎたところだった。

彼は新都の方に向けて歩き始めた。

【デーナッツ専門店・ミス・デーナッツ】

若い女性店員さんは一人の男を接客している。本来、この店では客が商品を選び、カウンター越しに店員に注文し、持ち帰る。または食べていく。そう、これが本来のあり方だ。

女性店員が中々注文をしない男に声をかけたのが“本来”というものを変えてしまったのか、この男が変わっていたのかと言つと、どちらもその通りと言えるかもしれない。

真っ赤なコートに金色の髪を逆立てて、オレンジ色のメガネをかけている。外国人かと思えば日本語は流暢に喋ることで、女性店員は安心し善意でカウンターから出で、横に付き、接客に入つてしまつた。

「お客様～？ そろそろよろしいですか～？」

「ちょっとと待つて下さ～～ね～。コレは～？ 」Jのピンクのソースがかかつてゐヤツ～！」

「い、イチゴのチョコソースですね。粒々の……（誰か代わつて…

…。）

「じゃあ、これも3つ～。コレは～？」

「ほ、ホ デーリングですね～大人気ですよ～

「じゃあコレは6つ～！ 以上で～！」

「かし～まつました～ではお会計を……（ああやつと解放される…

「！」

「あ、揚げたてにしてね？ 作り置きはヤダよ？」

「か、かしこまつました……（助けて……）」

女性店員は最後の方になると笑顔にも苦難の色が入っていた。お買上げありがとうございました。と言つよりも、お帰り頂きありがとうございました。と、こう最後の笑顔は、その日一番の涙を流すほど笑顔だつたように思える。

そう、ヴァッシュはドーナツに由が無い男だつた。

彼は種類豊富な商品選びに1時間ほどを使い、更に揚げたてを頼んでいた。

見た事も無い様な「コレーションのドーナツでは仕方が無いのかもしれない。

時刻は5時を回つたところだ。揚げたての大量のドーナツの紙袋を腕に抱え、ヴァッシュは洋館に帰つている途中だつた。マスターであるバゼットにも食べてもらおう。そう思つていたヴァッシュだが……。手摺に腰掛けて食べ始めた。

「せつかくの揚げたてだしへ。はぐつーんーー！ 激ウマーー！」

「お、お前は……ーー！」

「ほへ？ き、君は……ーー！」

ヴァッシュの田の前に立るのは数日前に死んだはずの衛宮士郎だつた。

衛宮士郎は目の前の赤いコートの男に鮮烈なイメージを持っていた。昨夜、学園で見た拳銃を撃っていた男だ。金髪で真っ赤なコートの男。

そして、昨日は青い槍使いに一度殺され、なのに何故か生き延びていて、また襲ってきたランサーと言う男にまた殺されそうになつた時、セイバーが現れた。

そして、遠坂凜に言われた事。監督者である言峰神父に言われた事。聖杯戦争。未だに信じられない事は多いけど、この左手に浮かぶ令呪と言う物がある以上、衛宮士郎も戦争に参加する者。他の参加者から殺される対象だと言つ事だ。

目の前の男もランサーと戦つていた。

つまり、衛宮士郎のサーヴァントのセイバーと同義の存在。自分がマスターではないと言う事は、敵のサーヴァント。衛宮士郎はまた命の危機に陥つていると言う事だ。

しかし、目の前の男を見て、衛宮士郎は恐怖や恐怖は微塵も感じなかつた。
何故なら……。

「生きてて良かつたなあー！ 辛かつたよな、痛かつたよな？ あ、食べるかい？ 揚げたてだよ？」

何故か敵である衛宮士郎を前に涙していたのである。マジ泣きだ。

「あ、アンタ……俺を殺したりしないのか？」

「ひなひよ？」

口にドーナツを運びながら、田の前のサーヴァントであるはずの男はしぬれつと言つ。もしかすると、自分以上に聖杯戦争と言つ物を理解していない男なのではないだろうか？ 卫宮士郎は田の前の男が心配になつて來た。

「衛宮君どつした……の！？ あなた、ガンナー！」

「やあ、また会つたね。デートかい？」

「あ、遠坂、ガンナーって？ この前聞いた話だとサーヴァントのクラスつてのにガンナーなんてクラスは……」

「違つわよ！ それよりもガンナー、あなたに聞きたい事があつたのよ！」

衛宮士郎の会話はスルーされ、遠坂凜はガンナーの前に詰め寄つた。

「僕つて一応サーヴァントらしくんだけビ、無闇に近寄つて良いの？」

「あら？ 戰つ氣あるの？」

「ありません」

「なり良いじやない。来なさい」

「お、おこ遠坂」

連れて来られたのは衛宮邸。

「シロウ、帰ったのですね、凜も……っ！？ シロウ下がつて！」

「せ、セイバー！？ 待つてくれ！」

「ほわあああ～！？ 美しいお嬢さん、僕と一緒にドーナツについて語り合いませんか？ アナタはドーナツの穴が何故開いているか分かりますか？ この穴は僕たちの愛で埋める穴。そう、ドーナツの穴は僕たちの為に開いているのですよ……」

ヴァッシュは目の前に現れた存在が自分と同じサーヴァントだと分かりながら口説き始めた。ドーナツについて語ると言つていたはずが、いつの間にか“愛について”になつて行く。

しかし、その何とも言えない空気を度外視すれば、驚くべきはその動きだつた。セイバーのサーヴァントが臨戦態勢を取つていないとは言え、一瞬で距離を詰められ目の前にドーナツを突き出されていたことだ。

もし、もしも仮にこれが武器であつたとしたら……。

「くつ！ フザけているのですか！？」

「セイバー待つてくれ！ コイツは多分悪い奴じや……

「セイバーちゃんつて言つのか～！ 食べる？」

「敵の施しなど……！ くつ……しかし食べ物に恨みは……」

「せ、セイバー？」

「……僕には恨みあるの？ 初対面で？ あ、このポンティーリングつてのが激ウマでね～」

しかし、このガンナーと言ひついサーヴァントの前では特に意味のない動きだつたりする。

「し、シロウ！！…………凛と同じ様に休戦協定を結んでください。この敵は危険すぎる！！」

「と、言いつつ田が僕の紙袋にしか行ってないけど、誰を敵だと思っているのかなセイバーちゃんは？」

「と、とうあえず、話を聞かせてくれないか？」

「い、これは…………恐ろしい、何と言ひつい食べ物だこれは…………」

セイバーはドーナツを口に運んでは、コクコクと頷いたり、ドーナツを睨みつけるように怪訝そうな顔を浮かべていたりしている。

「セイバーは放つておくとして……ガンナー、あなたの名前はヴァンシュ・ザ・スタンピードって言つてたわよね？」

「そだよ？」

「そだよつて……確かに、真なつて教えちゃまざいんじやなかつたのか？」

ドーナツを食べながら、ヴァンシュは答える。普通なら答えてはいけない事をだ。真名はその英靈の弱点を曝すことにもなる大事なモノだ。しかし、このヴァンシュにいたつて言えば、問題は無かつた

りもする。何故なら、バゼットも調べて諦めたのだが……。

「調べてみたのよ。でも、ヴァッシュ・ザ・スタンピード何て拳銃使い、どこにも出て来なかつたのよ」

そう、彼の情報などどこにも存在しないのである。

「そ、そんなに有名じゃ無かつたからね～」

ヴァッシュは焦る様に自分を過小評価し始めた。しかし、それも覆される。

「嘘付かないことね。この前戦つたランサーのサーヴァントと互角、いえ、それ以上の実力だつたんぢやないかしら？ アーチャーからも後で聞いたわ、全部槍を狙つて撃つてたつてね。殺そうとするなら急所を狙うでしょ？ なのに急所は狙わず、互角、更に最速のサーヴァントと言われるランサーを寄せ付けない敏捷さ、ちなみに知つてゐるだろ？ ナーランサーのサーヴァントはね、大英雄のクー・フーリンよ？ 槍使いじや、右に出る者はいないんぢやないかしら？ それに、さつきセイバーの懷にも入つたわよね？」

「り、凛！ さつきのは油断していたからで……！」

「あ、これも美味い。また行こうつと、ポイントも溜まる溜まるる～」

「聞きなさいよ！ 聞いた事も無い、調べても出て来ない。ヴァ

ッショつて名前は偽名なのかしら？」

「それ以外に名前なんて無いな～」

「嘘付いてるわけじやなさそうね……じゃあ、アンタの過去を教えなさいよ」

「……知つても、楽しい事なんて何もないよ」

急に真面目なトーンになるヴァッシュの声に、居間は突然重苦しくなった。

「わ、悪いサー、ヴァントじゃないんだろ？ ならガンナーも俺達と休戦協定を結ばないか？」

「衛宮君バカ？ マスターもいないのに結ぶわけないじゃ……」「よろしくお願ひします……！」

「おい」

「いやー、戦争だなんてやつても何も得られないって。マスターもきっと分かってくれるさー、おつともうこんな時間が、マスターに怒られちゃう、じゃあ僕はこれで……」

ガシツ

いきなりセイバーに掴まれるヴァッシュの左腕、その腕にはまだドーナツの残る紙袋が抱えられている。セイバーの目は臨戦態勢の目そのものだった。

「……え？」

「ガンナー、それは休戦協定を結んだ記念に置いて行くと良い」

「いっぱい食べてませんでした！？ マスターの分が……」「だ、駄目だと言つのですか！？」

「……置いていきまー」

「本当にサーヴァントのかしら？」

「悪い奴じやなくて良かつたじやないか」

「彼は信頼に置けます」

セイバーはドーナツを片手にキラキラした目で見送っていた。

「それで? 何をしていたんですか? ガンナー?」

「え、えーと敵情視察を! いやー敵の本拠地まで行つて来たんですけどね!? かなり多くのサー・ヴァントに囲まれまして!! 僕以外にワーカーとか、プーアーとか召喚されていましてね! ?」

「どこのワーキングプアですか!! それに口元に食べカスが付いてます!」

「嘘! ?」

「……嘘です。さあ、どこので何をしてきたんですか? ガンナー?」

「…………!!」

ヴァッシュは黒い革の手袋を嵌めて詰め寄つてくるマスターに悲痛の叫びを上げていた。

「なるほど、許容範囲を超えてますが……あの時のアーチャーのマスターの女子学生と、死んだはずの男子学生と一緒にお茶をしていました……あの子はマスターになっていたのね……イレギュラーか

しら？ イレギュラーならイレギュラー同士でガンナーを引き当てれば良いものを……。他に情報は？ セイバーだったんですよね？ 実力は？

「すんごい美人」

「いえ、そうでなくて。聞いても無駄かもせんが、戦わなかつたんですか？」

「戦いましたとも！ 僕の理性と彼女の美貌！ どちらが勝つかのせめぎ合い！ 僕は何とか勝利する事が出来……！」

「戦わなかつたんですね？ 全く……他には？ 話して何か情報は得られたんですか？」

「休戦協定を結んできました……！」

「……な、何を勝手な事をしているんですか……！」

「『めんなさい！ 『めんなさい！』」

振り下ろされる拳に、ヴァッシュは謝り続けた。

「でも良い子達だったよ。死なせたくないな……」

「……ふう、全く……私は一度死んだ身ですから、聖杯は手に入れられてラッキー程度に思いますよ。言峰綺礼も何か企んでるようですしね」

「ありがとウマスター」

「それで？」

「はい？」

「何を食べたんですか？ 私には？」

「……マスター！ こうしてはいられない！ 偵察しましょう……
街ではどんなサーヴァントが暴れているやもしれない……」

「これは？ ポイントカード？」

「二つの間に……？』

「ドーナツですか……ドーナツ好きのサーヴァントなんて聞いたことがありません……」

「『みんなさーー。』みんなわーー。』

第03話 「休戦協定」（後書き）

感想は隨時受付中

結構うろ覚えで書いています。

「！」が違う！…」等の激しい突っ込みはスルーします。

第04話 「理想を抱いて……」（前書き）

不定期不定期。

慌てない慌てない。一休み一休み。

第04話 「理想を抱いて……」

衛宮の家。

少し古めに映るが、立派な日本家屋を思わせ、更に広い。そんなどこにやつて来たのは赤いコートの金髪の男とステッラ姿の女だった。

「や、ども～」

「ガンナー、あなたでしたか。今日は何を持って来てくれたのですか？ またどーなつつですか？」

「いや、セイバーちゃん。僕の隣にいる人見えない？ 普通気付くのこつちが先だよ？」

「あなたがセイバーですか。私はこのガンナーのマスターのバゼットです。あなたのマスターはいますか？」

「シロウなら学校です」

「なつ！？ マスターともあろう者が学校に通い続けているのですか！？」

「はい。私も進言はしたのですが、逆に敵が『裏があるやも』と考え、まず手出しあしないと言う事でその様に……」

「理ありますね……では中で待たせて頂いても？」

「私にそのような権限は……」

「ちなみに今日のお土産は前回の3倍のドーナツ

「どうぞ中で話しましょ～」

「……これが本当にサー、ヴァント……？」

ヴァッシュは次々に消えていくドーナツを見ながらお茶を用意していた。

「よく勝手が分かりますねガンナー。湯飲みや茶葉がある場所まで「凄く綺麗に整頓されていたからね」。あ、僕の分残しておいてよ？」

「なつ！ ガンナー、あなたは自分で持参した手土産を食べると言うのですか！？ 「これは既に私のです！ どうしてもと呟つのでしたら……」

セイバーはもう滅茶苦茶な事を言いだした。

立ち上がり重心を前に置き、今にも騎士甲冑を身に纏うそうな勢いだ。

しかし、ヴァッシュは両手を顔の横にまで上げて首を横に振った。ソレを見てセイバーは満足げにドーナツに食り付いた。

しばらくして、家主の衛富士郎。

そして、既にここに下宿していると呟つ遠坂凜が帰つて來た。

「ただいま……つとガンナー！ それから……どちら様？」

「あなたが衛富士郎。セイバーのマスターですか？ 私はこのガunnerのマスターで、バゼット・フラガ・マクレミッシュと言います。

以後よろしくお願ひします

「ああ、ガンナーの……どうも」

「あら? 甘い香り……ああ、ガンナーじゃない。そちらがマスター?」

「バゼット・フラガ・マクレミッシュです。あなたは?」

「私はアーチャーのマスターの遠坂凜よ」

「遠坂……なるほど。では、休戦協定についてお話を……」

「ああ、そうだな」

「まず、私達の情報から行くわね? この聖杯戦争で一番厄介そうなのはバーサーカーのサーヴィアント。英靈【ヘラクレス】よ

「ほう、真名まで判明しているのですか」

「と言つた、相手のマスターが言つて来たのよ。それだけの自信があると言つことね。それに魔力もかなり余裕があるほど。バーサーカーを使役するのも問題ないみたいだから自滅は期待できない。ちなみにマスターはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」「アインツベルンがバーサーカーを……なるほど」

「一度戦つたけど、シロウが死にかけたわ」

「それにしては……怪我など無い様に見えますが?」

「私にもよく分からんんだけどね。セイバーから治癒の魔力が流れ込んでる可能性が考えられるの。シロウは逆に未熟だからセイバーに魔力供給することが出来ないけど」

「正規のマスターではないのですね。なるほど。では、私からは2点です知っているかと思いますが、ランサーはケルトの英雄【クー・フーリン】です。そして、私はその元マスターです」

「元……マスター？ アンタはガンナーのマスターじゃないのか？」「前に言つてた事は本当なのね？ 言峰綺礼がランサーのマスターだつて」

「ええ。言峰は私の腕を切り落とし、令呪の移植をしたかと思われる」

「言峰、アイツ……そんな事を！」

「でも私達が気付いてるつて事は、まだ知らないはずよ……時間の問題でしちゃうけどね」

「ああ～僕のドーナツがあ……」

「ふう、御馳走様でした。ガンナー」

ヴァッシュの持つてきたドーナツは全てセイバーの胃袋の中へと消えていった。マスターたちが眞面目に聖杯戦争について話している中、サーヴァントの2人はそれぞれ満足気な顔と、頃垂れる顔を見せていた。

「……コホンッ。このガンナーは……私にも不可解ですが、イレギュラーな召喚だつたのでしょうか。【ヴァッシュ・ザ・スタンピード】この名前に偽りはない、マスターとしてのリンクで分かれますが、聞いたことのない名前です。調べても何も出て来ない」

ヴァッシュは体育座りをして、指をのの字になぞらせている。

「で、でも悪い奴じゃないんだろう？」

「そんな事は見りやわかるわよ……はあ、じゃあまず最初に叩く敵を決めましょ。バーサーカーは避けたいわね。ライダーかアサシンかキヤスターか……でも私達も会った事があるのは、ライダーだけ。シロウが会ったんだけどね」

「私を呼ばなかつた時ですね？　学校で襲われたといつ……シロウ、やはり私も学校に連れて行くべきだ！」

「女の子に戦わせられるか！　何度も言わせるなよ
「シロウ！　いい加減に私を侮辱するのは……」

ガシッ

と、掴まれたのはシロウの肩だった。

「そう！　戦うなんて良くない！　怪我したらいたいもん！　誰とも戦わなくて良いと思います！！」
「ガンナー……少し黙つていなさい」

黒い革手袋をギュギュッと鳴らしバゼットは手に嵌めた。
立ち上がり足を運ぶのは金髪の男に向けたものだった。

「「めんなさい」「めんなさい」」

「……あれは本当にサーヴァントなのかしら……？」
「サーヴァントに生身の人間がマウント取つてるぞ……人間がサーヴァントに勝つなんて無理じゃなかつたのか？」
「あんなに易々と上を取らせるとは……何を考えているのだガンナ
ーは？」

「あ～落ち着いたかな？」
「ええ、失礼しました。では攻撃対象はどうしますか？」

「ライダーか、アサシンか、キヤスターか。

シロウの話だとキヤスターは柳洞寺に陣取つてゐるらしいわね」

「ライダーから聞いたんだ。魔女がいるって

「魔女か……士郎君。ライダーと言つのは……どんな奴だった?」

ヴァッシュの顔が真面目になる。

周りの空氣もつられるように引き締まる。

「え、えっと背が高くて、髪が凄く長くて、えっと膝裏以上は長かつたと思つた。それで、女で武器は……」

「顔は?」

「いや、マスクをしてて分からなかつた。アイマスクつて言つが、田隠しと言つが……」

「ガンナーどうしたんです? ライダーと知り合つて言つたじゃないでしょ? うね?」

「マスター。ライダーとキヤスターは、とりあえず僕に任せてくれないか? 会つて話がしたい

「どうしたんだ? 激しい真面目な顔になつて」

「戦いたくない」とか。ラブ&ピースとか言わないのね

「だつて綺麗な女性だとしたら会つてみたいじゃないか! ! !

「……シロウ。お腹が空きました」

夕日に染まる居間。そこには静寂がつまっていた。

「……ガンナー。寝ていなさい」

「うめんなやうめんなやう…」

そして、すぐさま喧騒を取り戻した。

ガララララア～！

「たつだいま～！！ さあ、桜ちゃんも入つて入つて～」
「はい

「おかえりなさい藤村先生」
「おかえり藤ねえ、婆もー

「ただいま、今日は何かな～。おお～揚げだし豆腐か～！」

居間に勢いよくやつて来た藤村大河の目の前には、セイバーが正座して晩御飯を今か今かと待つてゐる。そして、見慣れない赤いコートの金髪の男と、スーツ姿の女が目に入った。

「僕のドーナツは……」

「今までいじけているんですか……全く」

「つて誰だーーー？ シロウ？ 遠坂さんは家を改装中で、セイバーちゃんは切嗣さんの外国の知り合いで…… 今度は何だーーー？」
「お、落ち着け藤ねえ！」

「これは申し遅れました。私はバゼット・フラガ・マクレミッツです。実は少し離れたところにある洋館で、改築後に住む予定だったのですが、改築が進んでおらず、こちらの土郎君に助けて頂いたのです」

「また人間を拾つて来たの！？ シロウラしいけど、いい加減にしないと、無料ホテルとか言つ噂が立つて、ホームレスも集まつてくるわよ！？」

「そ、それがだな藤ねえ……」

トンツ

机の上に置かれたのは通称【一本】
帯付きの100枚束の1万円だった。

「生活費は入れさせて頂きますので、どうか」

「な、な、な……そ、そんなお金で解決するなんて人は認めないんだからーーー！ その金髪を逆立てた人もピアスしてるし学生のシロウと一緒に暮らすのは不健……ぜ……ん」

「僕？ そこを何とか。何にも悪いことしないよ。お願いプリーズ」

「い、いや、でもまあそこまで言つなら……そりやあ困つてるみたいだし？ 部屋も空いてるし……な、名前は何で言つの？」

「ヴァッショ・ザ・スタンピードですけど……？」

「ヴァッショさん……あ、揚げだし豆腐如何ですか？ 私が腕によりをかけて作つたの……」

「おい藤ねえ。帰つて來たばかりだし、それ作つたのは俺……ガツ」

竹刀で叩かれる土郎を見ながら、本名を名乗つたヴァッショは汗を

一筋垂らしながら「い、 いただきます」と言つた。

「シロウ、 あの程度の攻撃を避ける事も出来ないとは、 やはり私も学校に……」

「今はその話をするな…… あーもうー 飯だ飯！ー！」

「あ、 私食器出しますねー！」

「へ～砂漠の荒野から来たんですか～。 ガンマンみたいですね～！」
「みたいじゃなくてガンマンなの！」

「あはははははは～面白い人ですねヴァッショさんで～」

酒が入つた藤村大河は隣の赤いコートに寄りかかる様に飲んでいる。反対側の席ではバゼットが隣にいる大食いに何気ない質問をしていた。

「セイバーはよく食べるのですね？」

「シロウの『』飯は美味しい。 それに魔力供給が無い以上、 他で補えるものは補わなければ守るものも守れない」

「なるほど、 確かに供給が無いとなると、
サーヴァントとしても厳しいですね。 しかしセイバー
「何でしちゃうか？ メイガス」

「『』家の供給は間に合つのでしょうか？
「『』家の？ どういう事ですか？」

バゼットは家主の衛富士郎に視線を投げて続けた。

士郎は食後のお茶を飲みながら、家計簿を睨みつけていた。

「タダで料理が出てきているとでも思つているのですか？」

「そんな事は当然思つていません。」

シロウはそのためにバイトと言つものをしてくるのですから

自信満々に答えるセイバー。

しかし、桜も凜も士郎を不憫そうに見つめている。

「セイバー……良いですか？ 学生のアルバイトと言つモノは、あなたの食費を貰えるほど賃金は高くありません。士郎君を見ると良い。辛そうでしょう？」

「シロウは食後になるとこつもあのよつたな顔をしていますが？」

「働かざるもの食つべからずとこつ言葉があります。アレだけ食べて、いえ、今も食べ続けて食費を入れないとは何事ですか？ 鬼ですかあなたは！」

「なつ！ あなたにそのような事を言われる筋合いはない！ あなただってご飯を食べたではないですか！」

「あなたの目は節穴ですか！？ 私は食費を生活費としてお渡ししています」

その言葉に士郎は思い出したようにパアツと明るい表情になり、先ほど手に入れた100万円を棚から取り出し家計簿の修正を始めた。

「むつ！ メイガス」ちらとなさい！ シロウは幸せそうな顔をして

いるではないですか！！」

「ですから！　あなたの目は節穴ですか！？」

また対面側。

「何だか一気に賑やかになったわね～……」

「遠坂先輩。ヴァッショさんとバゼットさんも先輩の家に住むんですか？」

「そうね。改築とか言つのが1ヶ月弱かかるらしいから、最低でも2週間はいるんじゃないかしら？　あ、私も同じぐらいになるかな」「そうなんですか……あ、藤村先生。飲み過ぎですよ」
「あ～もう一、桜ちゃんは優しいな～。士郎のお嫁さんになればいいのに～」

「わ、私が先輩の……！？」

「なに真に受けてるのよ？　あら？　ガンナーは？」

「ああ、さつき外に出て行つたぞ？　夜風に当たつてへくるとかで」

衛宮邸の屋根。

屋根には誰もいない。様に見える。しかし、靈体化している者がいる。

遠坂凜のサーヴァントのアーチャーだ。

「よつと……あ、いたいた」

「貴様か……」

靈体化していく同じサーヴァント同士なら、その姿は見えてしまう。

よじ登つて来たのはアーチャーと少し被る赤い「コード」に身を包むガ

ンナーだった。

「お酒は？」

「飲まん」

「……あ、そ

会話が無く、ヴァッシュは酒を飲み始めた。

グラスに液体を注ぐ音と、風の音、

瓶の蓋を閉める音、液体を喉に通す音が聞こえる。

その沈黙とも言えるモノを破つたのは直立不動のアーチャーだった。

「……貴様は何が目的なんだ？ 本気で誰も殺さない気が？」

そう、サーヴァントである以上、戦うのが目的になる。

しかし、横で酒を飲む男が「戦つ」と言ったところを見た事がない。

「だつて……誰も死にたく無いじやん？」

「ふんつ。偽善か……」

反吐が出る。そう言わんばかりにアーチャーは鼻を鳴らす。

「ん」でも。君も同じような考え方持つてるでしょ？」

「私が？」ふんっ。私は凛の命令に従うだけだ。凛が戦わないと言えば従うが、アレも魔術師だ。聖杯を取りに行くだろう。休戦協定が解ければ真っ先に仕留めに行くぞ」

「土郎君と同じ匂いがすると思つんだけどなあ……あ、怒った？」
「……生憎と私はあのような理想は持つていない。一つ聞いておこう。貴様はイレギュラーかつ、それなりの力を持つたサーヴァントの様だ。しかし、誰も殺さずにこの聖杯戦争を終わらせられると言うのか？」

「生き方は変えられないからね。あ、もう空だ……」

「大方、どこぞの小僧と同じように誰も傷つけず、全てを背負いこみ自分が犠牲に傷付けば良いとでも思つてゐるのか。貴様の様な奴にはあの小僧がマスターであつた方が幸せだつただらうな？」貴様等はおめでたい連中だ。無意味な理想はいづれ現実の前に敗れるだろう。それでも振り返らず、その理想を追つて行けるか？」

「まあ何とかなるよ。出来そなうなら力貸してよね？」
「ふんつ勝手に……」

「あ、それからー！」
「……なんだ？」

「そりそろ服装被らないようこじてよねー！」

「……」

「ガンナー、どこですかー？」

「あ、マスター？ 上です。今おります……あ、ノヽヽヽ！」

踏み外すように、ヴァッシュは屋根から落した。

「あいたたたた……ん？」

「ガンナー……どこを触っているんですか！？」

「いのんなさいいごめんなさい……」

屋根に残るサーヴァントは下に落ちたサーヴァントと、それに跨り拳を振り下ろすそのマスターを見て溜め息をついた。

「……溺死してしまえ」

第04話 「理想を抱いて……」（後書き）

感想は隨時受付中。

さて、これからどうするか……。キャスター狙うかな……。いつその事バー サーカー 行くか？ いや、でもライダーも捨てがたいな。

……どうする？（アンケートの振りw）

第05話 「犠牲者は拉致されて……」（前書き）

久しぶりだね～待った？

そつか……いいさ、いいさ。好きで書いてるだけだもの。だつて人間じゃない。

byみつを

と、間違えつつ わけの分からないうことを言いつつ今回のお話しさは、【あの人】を利用して、【あの人】を攫つてしまおう！ つてお話し。

シリアス少な目、ギャグ大目、謎が浮かび上がるが、また次回！
ではでは、5話いってみよ～。

第05話 「犠牲者は拉致されて……」

（愛と平和のために戦う戦士。人は僕を愛の狩人と呼ぶ。

狙つた獲物は外した事が無い。それが女性のハートだとしてね）

「BANG」

「何してるんですかガンナー。行きますよ？」

衛宮邸玄関。

そこにはセイバー・アーチャー・ガンナーの3名とそのマスター達3人がいた。

話し合つた結果。キャスターのサーヴァントの住処となつている柳洞寺を攻める事にしたのだ。理由は単純明快。キャスターによる街への被害が大きいからである。

衛宮の友人である寺の息子、柳洞一成の話によると、最近になつて女性が居候として住んでいふと言つ事らしく……。

「僕だけで良いと思うんですけど~」

「ガンナー話を聞いていましたか？ 最弱といわれるキャスターのサーヴァントと、油断して呆氣なく退場ということもあり得ます。心してかかりなさい。……それとも、まだ相手が女性だと言う事で舞い上がっているのではないでしょうね？」

「ああ！ みんな気を引き締めて行こう！ 敵は柳洞寺にあるい！」

卷之三

氣を取り戻すように皆一様に集中して夜の街を歩く。一人を除いて。

「」

「……ガンナー、戦わないと言つならば今之内に帰るべきだと思つが？窮地に陥つうとも手助けはせんぞ？」

アーチャーが口を開く。マスターの許可なく発言するタイプでは無い彼が言つた事は、多かれ少なかれ、その場の者達が思つてゐる事ではあつた。

「別に良じよ。その時は凛ちゃんに助けを呼ぶもん」

「わ、私が助けるの……？」

「サー・ヴァントがマスターに、しかも他のマスターに助けを呼ぶとはどういう事ですか？」

皮の軋む音がヴァッシュの後頭部に広がる。

「じょ、『冗談ですか……つと、ここ』が入り口？」

「ああ、柳洞寺だ」

口数少なく登つて行く6名。

そして、山門が見えたその時 セイバーがいち早く気配を察知し跳んだ。

「セイバー！？」

ガキンッ！

「ほつ……挨拶も無しにいきなり斬り付けてくるとは……セイバーのサー・ヴァントとは、無粋な様だな」

「お前は？」

「アサシンのサー・ヴァント、佐々木小次郎

「「「「「つー」「」「」」」

「真名、言つてゐじやん！……言つちや駄目なんじやないのマスター！？」

「くつ！ 参りました……名乗られたからには、こちらも名乗り返すのが騎士の礼です。小次郎と言いましたね。アサシンのサーヴァント。私は……」

「よい、名乗れば名乗り返さねばならぬ相手だつたとは……いや無粋な真似をしたのは私であった。真名なぞ知らずともよい。我等にとつて敵を知るのはこの刀で十分。そつは思わんか？ セイバーのサーヴァント」「アーヴィング」

「ストップ！ ストップ！ 僕はね、話し合いに来ただけなの。戦いに来たんじゃないの！ という訳で、何でアサシンの君がここにいるか分からぬけど、用があるのはこの奥だから……通してくれない？」

ガンナーは大きく手を振つて割つて入る。

「ガンナー！ ふざけるのもいい加減にして下さい！ 私達は戦いに……！」

「貴様か……あの女狐の言つていた不確定な存在とは……サーヴァントが戦つ気がないとはな……。正直、恥騒しも良い所だと思わんか？」

「くつ！ 返す言葉もありません」

「マスター！？ ちょっと！ 君の所為で僕の好感度が落ちてるじゃないか！！」

「 「 「 「 (何を今更) 「 「 「 「

バゼットは、ガンナーに憐れみの目を送りながら、アサシンの言つた言葉に疑問を持った。

「ですが……『女狐』というのは、キャスターの事ですかアサシン。あなた達も協力関係になると?」

「協力? いいや、あの女狐は私を使役しているのだよ。私はもう『』を離れる事も出来ん。『』から先へサーヴァントは通すな』これが私の仕事だ』

「どんな理由があるか知りませんが、ここは私に任せて先へ行ってください。……ガンナーも! 何をいじけるんですか!」

「了解した。行くぞ凛」「分かつてゐわよ!」

「シロウ君。ここは任せました」「危なくなつたら呼ぶんだよ?」

「危なくなつてもあなたは呼びません」「ま、まあ何とかするさ」

シロウは自分の家から持つてきた竹刀を強化して4人の背を見送つた。

山門を抜けるとキャスターが既に戦っている。

キャスターは骨の兵士を何体も使い、時間を稼ぎ、相手の消耗を待つている。

戦っている相手は……

「ほああああ！ キャスターさんにライダーさんだあああーー！ 僕も仲間に入れ……！」

「ガンナー、あの二人が楽しそうに遊んでいる様に見えるんですか？」

アーチャーは鼻で笑い、凛は額に手を置き、溜め息をついている。

「あらあら、こんなところまで入ってきて、今日はお姫さんが多いわね。まとめて相手するのは少し大変かしらね……」

「僕にお任せを！ 僕は愛の狩人、ヴァッシュ・ザ・スタンピード。あなたのお力にならせて下さいー。さあ、こちらの御婦人を虐める方々ー！ どうからでもかかってきなさいーー！」

「ガンナーいつの間に寝返ったんですかーー！」

「ふふふ……良い子ね。ポチ、ではあのライダーから始末なさい」

「キャスターも少しココが弱いのかしら？ そんな言つ事なんてガソナーが聞くわけ無いじゃない」

「そうだな、それには肯定しかできない上に、仮にも同じサーヴァントとして心外且つ嘆かわしい。しかしだ、凛。この場合、頭が弱いのは君だと言う事になる」

「何でよーー？」

「ワンツ！ 御主人様～」

「見ての通り、アレが言つ事を聞いてしまつ戯けだからだ

ガクッ！

ライダーはマスターから、衛宮士郎達がアサシンを相手にしているドサクサに紛れて寺に入りキャスターを始末する命を受けていた。

目の前には骨の兵士。その相手が終わると、赤いコートの一人が目

に付く。一人は金髪でキャスターの僕みたいな犬だ。もう一人は双剣を手にしている白髪の男だ。

「ガンナー！　いい加減にしなさい！！」

「アーチャー……」なんくだらない所で死なないでよ？」

「ああ、分かつていいわ」

とりあえず、犬は噂のイレギュラーであるガンナー。そして、今のところ「チラに攻撃の意思はないアーチャーと、そのマスター」。

ライダーは感情を表に出さないサーヴァントらしいサーヴァントだが、これには鼻で笑った。

「ふつ……ガンナーとは誰にでも尻尾を振るサーヴァントなんですか？　つ！？」

しかし、ライダーが気付いた時にはいつの間にか銃口を向けられている。

ドンッ！

しかし、ライダーは余裕を持つてかわしている。銃口を向けられてから間があった様にも感じたが、ライダーはその間を利用してガンナーのコートのボタンを二つ取つっていた。

「……それぐらいの早さならば……私が本気でしたらあなたは2度死んでいましたよ？」

言葉と同時にボタンを地面に落とすライダー。

ソレと自分のコートを確認してガンナーは真剣な面持ちで答えた。

「僕がその気なら君は5回……乳を揉まれていた」

顔を緩ませ、手をワキワキとするガンナー、するとライダーの服の胸元に切れ目が入った。ガンナーもライダーと交錯する中で彼なりの攻撃をしていたようだ。

「くつ！ ランサーを退けていたのは本当でしたか！」

最速のサーヴァントであるランサー。それを退けたにしては遅すぎると思った矢先のことだ。ライダーは気持ちを切り替え、目の前のガンナーにダガーを構える。

「真面目に戦いなさいガンナー！ ソレが出来てどうしてあなたは……！」

「隙ありねライダー」

サクッ

キヤスターによる突然の後方からの刃物に刺され、ダメージを負うライダーはバツクステップで距離を取る。しかし、致命傷では無い。

「ぐつ！？ な、何を！？ その様な小さな刃では……！」

「あら？ でもあなたのマスターとの契約は無に帰したわよ？」

「ルールブレイカー
破戒すべき全ての苻……ギリシャ神話『裏切りの魔女メディア』

か！」

バゼットはその効果の宝具から、すぐに所有者であるキャスターの真名を弾きだした。

「御主人様～これでライダーちゃんは自由の身なんですね～」

「ええそうよボチ。あなたもあの怖いマスターから解放してあげるわね」

「ガンナー！ アンタ本気で裏切るつもり！？」

「が、ガンナー！ いつまでキャスターの犬をやっているんですか！？」

「今、終わりましたよマスター」

ドンッ！

バキィイインッ！

「ポチ、どういう事かしら？」

ヴァッシュの銃弾はキャスターの物理障壁に阻まれた。

「ごめんなさい。人妻の香りがするんでパスします！ では失礼して……！」

「な、何ですか！？ ちょっと…？ 放しなさい！」

ガンナーに抱かれて暴れているのはライダーだ。

「マスター撤退を！」

「え、しかし……もう一つ、分かりました！」

「ライダーを攫つて……何考えてるのかしらアイツ……」

「今までの奴の行動を見る限り明白だが……まさかね？」

キキンッ！

「セイバー！」

「シロウドがつて！」

「2匹の燕を捉えるのは一苦労だな……いや、一匹は咎も無い鳥か

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎の燕返しをかわしたのは幸運だった。足場が揃つていればセイバーの鎧、または衛宮士郎の首は胴体と離れていたかもしね。

多重次元屈折現象。全く異なる軌跡を描く三つの斬撃を、文字通り

全く同時に繰り出すというものを田の当たりにして、セイバーは一種の感動すら覚えていた。宝具を持たずに宝具の域にまで達した修練の化身。田の前にいるサー・ヴァントはこれまでに騎士道を弁え、撃ち合ってくれる。

しかし、その感動は僕くも崩れ去つた。

崩れると正言葉通り、上から下へという現象だ。

「おおおおおあああ～～～～～！…これは大変ですよ～～～！」

叫び声を聞いたセイバーは上を見上げ、声の主に聞き返す。

「どうしたのです!? ガン……ナ……?」

「大変なのは俺なんですよーーー！！！」

バランスを崩しながらガンナーは田隠しをしたサーヴァント……キヤスターには見えないため、恐らくライダーであろう人物を懐に抱え、山門から飛び出してきた。後ろから続く、バゼットや凛とアーチャーは普通に階段を駆け下りてくる。

しかし、ガンナーは横に反れ、階段脇の溝の段に平行に足を乗せ、さながらスケートボードや、スノーボードと言つた様子で勢いよく下つて行く。良く見るとガンナーの靴底は金属製の様で、これが良く滑る様だ。

「……………」

「バランス！ バランスを取つてください！」この下手くそ／＼

「……」

騒いで下りて行くガンナーとライダー。ライダーがライドしているのは波に乗り切れない余程の暴れ馬のようだ。

「ちつ 邪魔が入ったか……行くがいいセイバー。私はここを動けん、また相見えようぞ……む？ ふつ……またな」

カツコよく再会の口上を述べるアサシンだが、セイバーはガンナーの騎乗スキルを見送っていた。

バゼットはアサシンに頭を下げた。

「アサシン、お邪魔しました。出来れば今度はガンナーは置いて来よつかと思います」

「出来ぬ事は無理にせんで良い……が、健闘を祈りたいな

何故か戦おうともせずにバゼット達は下り、アサシンは登つて行く。

「で？」「レディにするのみ？」

遠坂凜は頭を抱えて田の前のアイマスクをしている髪の長い女性を見ている。

「私のマスターとの契約は間違いなく切れています。もう私には戦う理由もありませんから、消えるのを待つのみです」

シレッと答えるライダーは、隣の視線を意図も介さずに無視している。

「ライダーちゃんか～綺麗な髪だね～。あ、お茶飲む？ ドーナツは好き？」

「ガンナー！ それは私のドーナツでは無いのですか！？」

「いや、僕が買つて来たものだし……」

「そんなバカな！ あなたが買つてきたドーナツは毎回私が食べているじゃないですか！」

などと、平和かつジーしょーもない良い争い（争いにすらなつていな）をしているガンナーとセイバーを眺めながら、この家の主は計算をしていた。

「サー・ヴァントが4人、マスターが3人、藤ねえと桜で9人が……食費がな……バゼットさんのアレだけで足りると良いんだけど……」

「土郎君！？ ライダーも住まわせる気ですか！？」

「……」

「え？ そりゃあ、ガンナーが連れて來たんだから……違うのか？」

「私は屋根で警備をしている。好きにしてくれ」

「あ、アーチャー！？ くつ逃げたわね！ つたく……でもマスターがいられないんじゃねえ／＼……」

ライダーは先ほどから飛び交う会話に疑問を持ち、田の前でお茶を飲んでいる警戒心ゼロな人達に聞くが……。

「私をどうする気なんですかあなた達は？」

「…………」ガンナーに聞いて（くれ）（（べだせこ））（よ）」「

「……」

「…………それは困りました」

「えー？ 僕には聞いてくれないのー？」

ガンナーは眼を輝かせて今にも涙を流しそうだ。
何ともメンドクサイ男である。

「……この世から消える最後に疑問を抱えるとは……」

「まあそう言わずに、僕のマスターと契約すればいいんだよ

「「「「はあー?」」」

「……それはどういう事でしようか？ 意味が分かりません ガンナーのサーヴァント。自分のマスターを魔力切れで潰すつもりですか？ 令呪も無いですし……」

ヴァッシュは戸棚から隠し持っていたドーナツをテーブルに広げて食べ始めた。

「んほへ？ まふはーはほふとへいやふ……」

「ゴシンシ

と、ガンナーは手の甲で軽くバゼットに叩かれた。

「食べながら話さないでください、ガンナー」

「……（ゴクリ）失礼。あのね、マスターは僕と契約してるけど令呪とかは無いからマスターに負荷とかあまり掛かってないみたいなんだよね。だから、マスターとライダーちゃんが契約すれば大丈夫なのさ……（モグモグ）あ、ほれも美味しいね……（モグモグ）」

「私も頂きます（パクパク……モグモグ……）」

セイバーもドーナツへと武力介入を始めた。

そして、ライダーを含む冷静な人達は少し疑問に思い、分析し、叫びをあげた。

「「「「.....」あああああああつーー」「「」

第05話 「犠牲者は拉致されて……」（後書き）

感想は隨時受付中

ガンナーは契約してるけど令呪がない？

令呪があると勘違いしていたバゼットさんの運命やいかに…？

今週の【ゴールデンハンマー轟…】は「」もど…

次回も絶対見てくれよな？

次回は敵の幹部【アグラニヤーテ】について研究していくぞ！

では次回も…「ゴールデンバット」

……おつと間違えた。

次回は 今回の謎と、ライダーさんと、増えるワカメについて考察していくぞ！

じゃあまた不定期でいつになるか分からぬいけどよろしくね

第06話 「衛宮邸に増えて行く人々」（前書き）

1か月放置！

すまんね！ あいやしづらへーーー！

前回までのやうに。

ライダーがキャスターのルールブレイカ で契約破棄されたところを拉致して来て、衛宮の家に連れ帰りました。そんで、マスターどうする？ って話のところで、ヴァッシュは自分のマスターなら誰とも契約しないから良いんじゃない？ と言いました。

さて、ガンナーってじやあ何なのよ？

「ちよつと待ちなさいよー サーヴァントじゃないって言つのー?」

凛はガンナーの胸倉を掴んで足を卓袱台に乗っけている。

「おわあああ！ 違う違う！ サーヴァントで、マスターと契約してるよ？ してるんだけど、どういう訳か、令呪とかマスターの負担になる様な事はほとんど無いから」

そう、バゼットにヴァッシュを使役する絶対命令権である令呪は無い。

「バゼット、それは本当なのか？」

家主の衛宮士郎は困惑しながらガンナーのマスターに問う。そして、帰ってきた答えは肯定だった。

「私もおかしいとは思つていたのです。バスは繋がつていて魔力も多少は供給しているのに、多くを必要とせず、それでいて……令呪がない事に」

「どうなつてゐるのよ……」

遠坂凛はお茶を一口飲み再び考え始める。

「ガンナーおかわりは無いのですか？」

「無いよ、食べちゃつたじゃん……」

空になつたドーナツの入つていた箱を折りたたみ、ガンナーは溜め息をついた。

「あの、もしも私を契約させると言つのでしたら、希望したい人物がいます」

今まで諦めムードだつたライダーが遂に口を開いた。

「どう言つ事？ 前のマスターと再契約したいつて事？」

「いえ、ちょうど仮のマスターがウザかつ……本来のマスターに戻せるいい機会かと思いますので」

「今、何か凄く黒いモノが見えた気がするけど……ライダーちゃんの本来のマスターって？」

「慎一がマスターじゃなかつたのか！？」

衛富士郎はガンナーを遮り驚く。

それもそのはず、つい先ほどまでは衛富士郎・遠坂凜の中ではライダーのマスターイコール間桐慎一だつたからだ。

「ま、待つて……嘘でしょ？ もしかしてマスターつて……桜？」

「え？ お、おこ爐だろ？」

「ほへ？ 桜ひやん？」

凛は顔を青くする。士郎は信じる以前に飲みこみ切れていない。ガンナーはお茶を片手に夕飯を作りに来てくれる娘だと理解した。

「なるほど、昨日の彼女は間桐の人間でしたか

バゼットも令呪の事はどうでもよくなつたのか、頭を切り替えた。

静寂が居間を支配する。

「良いんじやないの？」

「ガンナー、私達が口出しして良い事ではありません

「ちよつちよつと待つて！ 大丈夫だつてマスター。確かに桜ちゃんはマスターっぽくないけど、戦わせるためじやなくて、ライダーちゃんと仲良く平和にしてもらえるように契約するだけだつて。ね？ 何もそんな真剣に悩む必要なんて無いって。ほらライダーちゃんも桜ちゃんと一緒にいたいみたいだし」

ガンナーは両手を上げたまま殴りかからんとするバゼットを止める。

「これは聖杯戦争なんですよ！？ いい加減に真面目に戦わないと多くの死者が出てしまつんですよ！？ ガンナー！」

バゼットは普段からのヴァンシュのサー・ヴァントとしての姿勢を正そうと説得を試みるが、イレギュラーな彼を縛る事が出来るモノはない。絶対命令権の令呪は無いのだから。

「大丈夫ですって。ね？」

「私に振らないでよ……十郎は？」

「え？ あ、うーん……桜に話しかけてみないと……」

「仮にも戦争だと云ひのに桜を巻き込む様な事は避けるべきだと思いますが……」

ライダーは事の成り行きを見守る」としか出来ないで黙つている。

そして……。

「せ、先輩もマスターだったんですね……」

「戦つつもりはないからな？ 僕はこの聖杯戦争を終わらせるために戦ってるんだ」

「うんうん。良かった良かった

「本当に……何を考えているんですかあなたは？」

ドーナツが大量に入った茶色の大きい紙袋を抱える様に持ち、ヴァッシュは一つ、また一つと口に放りこんで行った。

「ガンナー！ 私にも下さー！ どうして意地悪するんですか！？」

「意地悪って、僕が貰つて来たの。だからこれは……」

ギランツ！

獅子の獲物をロックオンした眼はガンナーへと移つて行った。

「……これは一緒に食べようか？」

「望むどいりですー！」

「全くセイバー、あなたには食べると云つことしか頭にないのですか？」

「ライダー。仲間になつたとは言え線引きは必要かと思いますが？」

「私は商店街の骨董品店でアルバイトを始めました。もちろんこの家に住まわせてもらう生活費の為です。あなたは食べるだけですか？ そもそも食費を湯水のように流して行つてているのでしょうか？」

ガーンツ……

「わ、私だけが……働いていない?」

セイバーはここに来て、味方がいない事に気が付いた。
日常の味方と言つモノがない事に。

「と聞つ訳で…」

スパンツ！

「何がと聞つ訳なんですか?」

「話す前に叩かないで下さ」よおマスター。……とりあえず次はバ
ーサーカーを落とすべきだと思います」

「落とすつて……アンタは戦つ氣ないでしょ?」

「その通り!」

「「「「はあ……」」」

「ま、まあまあ。昨日の夜イリヤの事話したらなんか乗り気でや
…な?」

そう、ガンナーであるイレギュラーサーヴァントのヴァッシュは次なる標的をバーサーカーに定めていた。

「まあ聞いた通りのサーヴァントなら何とかなると思つんだよね～

「またそんな適当な事を……」

「それから今回は僕だけで行くよ」

「なつ 私達を置いて行くと言つのですか！？」

セイバーは喰つてかかる。いつもは戦わないと言つていた男が自分一人だけで敵陣に乗り込むと言つ出したのだ。

「何で今更そんな事を言つ出したのかしら？ イリヤは女の子、まだ小さいわよ？ ロリコン趣味だったの？」

「ははは……そつ言つんじゃないでさ」

「……そつ言つ事でしたら、私はついて行きますよ～。マスターですからね」

令呪も無いマスターのバザットはそつ言つぜぬ。

しかし先ほどから言われている通り、不殺・ラブ＆ピースと戦争中に詠うサーヴァントが何故戦うと言つ出したのか？ ヴァッシュの考えはこうだ。

バーサーカーはこの聖杯戦争の中で最強を誇る。それはサーヴァントだけでなく、マスターも魔力を潤沢に有しているためだ。普通なら魔力供給のコストパフォーマンスも含めて考えると、バーサーカーはかなり燃費が悪いため、セイバーが最も良いとされるが、今回のマスターが衛宮士郎ではマスターとしては正直言つてヘボ。魔力供給も出来ない。恐らく宝具を使用すれば即座にリタイアするのではないかと言う予測があった。

では遠坂・アーチャー・コンビはどうだろうか？ 未知数の能力を持つアーチャー。そして、魔力に申し分はないと思われる遠坂凛。バランスの取れているコンビだろう。しかし、バランスが取れているだけでバーサーカーを相手にするとなると生きて帰れる可能性は薄い。

では、ガンナーというイレギュラーであるヴァッショ・ザ・スタンピードが戦つたことも会つたこともない、最強と言われるバーサーカーのサーヴァントには死ぬ危険性が無く勝てるのか？ その答えはNOだ。

やつてみなくては分からぬ。だが、自分以外が行けば死ぬ可能性があると判断した瞬間にヴァッショの意思は決まった。自分が行くと。

「とりあえず、もう少し考えたら？ またキヤスターに動きがあるかも知れないし、言峰のランサーだって動いてないわ」

「……うん。 そうだね」

「じゃ、じゃあ買い出しに行つてくるか。今日は何食べる？」

少し間があったものの納得したであつたガソリンナーを見た家主、兼口ツクの士郎は立ち上がる。

「シロウ、この前食べた肉じゃがと並びモノは難しいのでしょうか？」

「分かった。じゃあ今田のメインは肉じゃがにするか

「先輩。私も手伝います」

士郎は買い物に出かける。

桜は米を研ぎ、今ある材料の下ごしらえを始める。

そう、また今日と同じような明日が来る。

みんなそう思っていた。

しかし、それは衛門士郎が誘拐されるところの事件から覆ることになる。

【アイントベルン城】

「ぐつ！ イリヤー！ 俺はウチに帰つて食事の支度を……」

「私のサーヴァントになるって言つまで帰してあげないわ。気が変わつた頃にまた来るからねお兄ちゃん」

と言つた会話をしたのが数時間前。

衛富士郎はイリヤと商店街近くで会い、そして、催眠魔法をかけられ攫われていた。

士郎は椅子に座らせられ、後ろ手にロープで縛られ身動きが取れないでいる。

「と囁き聲で……」

スパンッ！

「天丼はいりません

「（えすりさすり）マスター、そんなこと言つてる場合ぢゃないですつて）。攫われたんですよ～？ 僕らの士郎君が」

「私のマスターです。私も行きます」

「当然私達も行くわよ～？」

「わ、私はどうすれば？」

凛は行く気満々で、桜はオロオロしている。
しかし、ヴァッシュはそれを静止させて言った。

「どう考へても罷だ。どうしても来るつて言つなら……安全などこ
ろまで離れていてくれ」

「なつ それじゃあ行く意味がないでしょうが！」

「そうです！ それに私はサー・ヴァントですよ！？ 私のマスター
が攫われていてるのに助けに行かないサー・ヴァントがありますか！」

「それでも！ ……頼むよ」

オレンジ色のグラスの銀縁のメガネをかけ、ヴァッシュは言つ。
その口調にいつもの軽口を叩く雰囲気は微塵も感じられない。

そして、数十分後。アインツベルンの森の奥にある城にガンナーと
マスターであるバゼットは到着していた。気配を消し、夜の森と一
つになる様に一つの影は薄れて行く。

「さて、行きますかあ

「大丈夫なんですか？ あなたはバーサーカーと戦つたことも、見
たことも無いでしょう？」

その当然とも言えるマスターの問いにヴァッショは苦笑いで答える。

「多分……」

第06話 「衛宮邸に増えて行く人々」（後書き）

感想は隨時受付中です。

次回、第7話【HARD PUNCHER・2】

何故『2』か？ それはヴァッショを知ってる人だけが知っている。

第07話 「HARD PUNCHER・2」（前編）

定期更新10日……も どうか分からぬけどねw
出来るだけスピードアップできれば……と思つてゐんですけどね。

まあとりあえず第7話じゃ。

第07話 「HARD PUNCHER・2」

「ガンナー名案があると言つていたハズですが……？」

「え！？ 駄目ですか！？ 完璧な作戦だと思つたんですけどーーー！」

ヴァッシュがバゼットに進言した名案ところはいつである。

1・ドーナツ（30個入り）を菓子折りとして持参する。

2・喜んで食べててくれている間に、バゼットがシロウを探し救出。

3・こんなに良い人たちなら戦わなくて良いかも。と思わせたところで退散。

「大前提として、ドーナツで喜びそなのはあなたセイバーだけです！ それにドーナツなんていつの間に用意したんですか！」

「細かいこと気にしない気にしない じゃあマスターはシロウ君をお願いしますね～」

「本当に一人で大丈夫なんですね？ 令呪による魔力のブーストも無いんですよ？ それに相手はヘラクレスですから、命がいくつあっても足りないんですよ？」

「ん～大丈夫ですよきっと。ほら、逃げる事だけなら僕自信ありますから～」

「……そうですね。では…」

「はいは～い」

ヴァッシュはバザットと別れ、楽観的に扉を開いた。

「あり、いらっしゃい。真正面から来るなんて大した自信ね。私のバーサーカーに一瞬で殺されちゃうのに」

「いやあ～殺されたくないな～。仲良くしようよ～なははは～」

「ガンナーのサーヴァント。イレギュラーな存在ね……早めに脱落してもういいまじょうか。行きなさいバーサーカー！」

「…」

「まあまあそんなに急がなくても、ドーナツ買つてきたからさ。少し食べながら話そうよ。ね？」

「……」

しかし、命令を受けたサーヴァントが止まる事は無かつた。一直線にヴァッシュへと接近し、巨大な岩の斧剣を振り下ろす。

「ボンッ！！」

「……こ、怖～っ！」

風圧を感じ、顔を歪ませるヴァッシュは元壁にかわしたと思つていた。

しかし、風圧だけで左腕に巻きついている革バンドが数本切れた。

「なるほど、元壁にかわしてもコレですか……」

「どう？ 降参する？ 降参するなら出来るだけ苦しまずに戦してあげる」

「つて、あ、あああああーっ！？」

「な、何！？」

ヴァッシュの視線の先にはバーサーカーの足がある。その下には踏み潰されたドーナツがある。どれも原形を留めている物はなく、ヴァッシュは一かけらを手に乗せて会話の通じないバーサーカーに泣きながら詰め寄った。

「僕のドーナツツツが！ 酷いじゃないか！！ まだ一つも食べてないのに～！ もうこんなボロボロに……ビーしてくれるんだ！！ 僕のドーナツツツ～～～！」

「な、何を言つてるの？ バーサーカー殺しなさい～！」

「！」

しかし、バーサーカーの斧剣が振り下ろされた場所にはもうヴァッシュユはいない。バーサーカーの身体にしがみ付き、ドーナツツツを返せ。弁償しようと泣きながら呪詛の様に泣いて這いまわる。

「何で動きなの……バーサーカー！ 引き剥がして殺しなさい～！」

命令は的確かもしれないが、ヴァッシュユはバーサーカーの捕まえようとする腕を高速でかわしている。どの様な動きをしてもヴァッシュユを引き剥がせないでいる。

「ガンナー！ 撤退しますよ～～～！」

「もう一人いたの～？ くつ！ お兄ちゃんまで～～～！」

もう撤退しようと叫びだつた。しかし、ガンナーは撤退を決め込まない。

「何をやつているのですかガンナー！…」

「良く分からぬけど、それならアッチの方からやつちやえバーサー！…」

「…」

その巨躯はバゼットと助け出されたシロウへと向かつた。ヴァッショはバーサーカーの頭部に回り、銃を抜き取る。そして、バーサーカーの右手である剣を持つ指に向けて撃つた。しかし、バーサーカーは手を引いて斧剣で銃弾を受け止める。

「

「……それでも、僕は殺さない」

ズシャーンッ！…

ダンダンダンッ！…

ガキンシギギンッ！…

ダダンッ！…

ギギイイインッ！…

銃弾はリボルバーから無くなる。ヴァッショはすぐさまスピードローダーでリロードする。その光景を呆然と見つめる一人の仲間に、ヴァッショは声を上げる。

「逃げる！」

「ガンナー！ お前も一緒に……！」

「……生きて帰りなさい。いいですね？」

「バゼットー？」

スチャツ

「必ず戻る」

ガンナーは頭上に向けて銃を連射する。

そこにはもう屋根と言うモノが存在しなくなつた。見えるのは星空だ。

そして、そこにいつものガンナーの姿は無かつた。

アインツベルンの城の正面ロビー。

そこには最強のサーバントのバーサーカーがいる。
イレギュラーのサーヴァントのガンナーがいる。

バーサーカーの斧剣が振り下ろされる。

ヴァッシュの銃弾が斧剣を握るバーサーカーの指に撃ち込まれる。
バゼットの魔力が込められた銃弾は何度かバーサーカーの指が吹つ
飛ばすが、すぐに再生してしまつ。

「「」いや大変だ……不死身の狂戦士か……」

「ふふふ、何を考えてるか知らないけど無駄だよ。私のバーサーカーは強いんだから」

そうマスターに言われて突撃して来る狂戦士。ヴァッシュは真っ直ぐに銃を構えて連續して撃つた。

1発目、左肩に当たる。掠り傷程度の傷に入る。

2発目、同じく左肩に当たる。掠り傷が少し範囲を広くする。

3発目、また左肩だ。掠り傷が斬り傷になる。

4発目、正確に同じ場所を狙い撃つ。肉が抉れる。

5発目、ここまで同じ場所に狂いなく当たる。支点がずれ、バーサーカーはその巨体をヴァッシュでは無く、壁にめり込ませた。時間にして1秒の出来事だった。

「そ、そんな！ 鉄砲6発なんかでバーサーカーのバランスが崩れるなんて！？」

「違うよ。まだ一発残ってる。スペシャルなヤツがね」

ヴァッシュはリボルバーのシリンドラーを外し、空の薬莢を飛ばした。残りの一発を残し高速回転させる。

力チャツ

シリンドラーを銃に固定し、バーサーカーのがら空きになつた背中にバゼットが魔力を大目に込めた弾を撃つ。

ドンッ！！

「

！！「

その銃弾は炸裂し、凄まじい魔力の光を放つ。魔力と銃弾と言う組み合わさったモノを身体にねじ込まれ、バーサーカーは叫び声を上げる。

しかし、それでも傷を負った程度だ。ヴァッシュは自分の銃を見ながら考えた。アレを使うしかないのか、と。そして、その考えはすぐさま実行する事になる。

「何なのよ……何なのよアイツ！ 殺しなさいバーサーカー！！

イリヤ・スファイールは息も切らさずバーサーカーの攻撃をかわし続け、更に急所を外し、再生されるのを知りながら指を吹っ飛ばす銃弾を放つ目の前の金髪の男に苛立ちを覚えていた。まるで、わざと殺さないでいるかのような施しを受けているようだった。

「

！！

バーサーカーはマスターの命令を酌みガンナーに突貫する。

ヴァッシュは銃をバーサーカーに向ける。

しかし、その銃はあのよくな形だつただろうか？
ガンナーの腕はあのよくな形だつただろうか？
いや、更に変化していく。

それはヴァッシュの宝具【エンジェル・アーム】だった。

腕は銃と同化し、白い片翼の天使の羽が生えて行くようだつた。
その輝きは美しく、全てを照らして行く悪魔の光だつた。

「な、何とか……制御できるか……威力も抑えて……」

「な、何よそれ！？ 戻りなさいバーサーカー！ アイツ何か変だ
わ！！」

「！！」

しかし、突貫して行くバーサーカーは止まれない。

そして、光がバーサーカーを包み込んでいく。

城から撤退して行くバゼットと土郎は城の方で輝く光に振り返つた。

「な、何だあの光……！？」

「ガンナーの宝具でしょ！……シロウ君。もうここで大丈夫ですか？ 私はガンナーの下に戻ります」

「あ、おい……！ ああくせつ！」

士郎は再度家に向かつて走り出す。

セイバーを連れて戻つてこようと考えていた。

あの男は死んじや駄目だ。そう考えての行動だった。

衛宮士郎の中でのガンナーは異質とは言え、
ある意味で自分の理想と言える考えを実践している男であった。

誰も殺さない。

全てを救う。

正義の味方。

仮に自分が傷ついたとしても平和を求める男に見えた。

日常の中ではヘラヘラ飄々として、Love & Pea

ceと言っているが、

その軽口を叩きながら、実践している男に思えた。

そんな男だからこそ死んでほしくないし、助けたいと思った。

そんな衛宮士郎自身には助けられる力は無いに等しい。

そんな衛宮士郎が戦わせないと言い続けているセイバーに力を借りてでも自分の憧れに近い男を救おうと思つていた。

「死ぬなよ……死ぬなよ……」

瓦礫に覆われて行く城のロビー。

そこには蹲る巨体のサー・ヴァントと、赤いコートの金髪のサー・ヴァントがいた。

「な、何なのよあなた!! バーサーカーが防御の姿勢を取るだなんて……」

「今のは威力を抑えて撃つただけど、今の数十倍は撃てる……もう降参しない?」

バーサーカーは呼吸を整えて傷付いた個所の再生に集中している。

「数十倍!? う、嘘よ……バーサーカー! 早く再生してこんな奴壊しちゃって!!」

ヴァッシュはイリヤの声を聞き、仕方が無いと溜め息をついて、イリヤのいる階段の踊り場へと進んでいく。

「な、何よ?」

ゆっくりと歩み寄つて来るイレギュラーにイリヤは怯む。

人であつたモノが生前に英雄となり、英靈となつたサーヴァントを殺すのは難しいが、サーヴァントを使役しているマスターを殺せばサーヴァントは自然と消える。それがバーサーカーであれば尚のこと容易い。

イリヤ・スファイールはそれを直感し、バーサーカーに救いの視線を向ける。

しかし、未だ再生をしている曰漢のサーヴァントは蹲つたままだ。令呪を使用してでも目の前の男を消すべきか？

「君は……」こんな事をすべきじゃない

「ちつ…… つまらんぞ道化が」

「だ、誰つー？」

突然聞こえてきた声。それは頭上からだつた。

顔を上げた先には無数の剣を浮かせているスタイリッシュな格好をした男が一人いた。

「敗者は殺さんと聖杯には成らんぞ？」

パチンツ

男が指を弾く。

そして、無数の剣が蹲るバーサーカーに突き刺さつて行く。

「！」

「ば、バーサーカー！？」

「や、止める！！」

雨の様に降り注ぐ剣にバーサーカーの咆哮だけが響き渡る。

バーサーカーは暴れる。再生よりも反撃を優先し、狂戦士として、斧剣を振り回す。

何本かの剣は払い落とすが、それでも何本かの剣はバーサーカーを貫いて行く。

ヴァッシュも何本かを撃ち落とす。それでも剣の雨はやまない。

「ふんっ、天の鎖よ！！」

バーサーカーに鎖が巻かれる。

「ふはははは！ その鎖は例え神であつても逃れることは叶わぬぞ！」

反撃の術も無くなり、首に締まる鎖により咆哮も出ない。

そして、バーサーカーは光の泡沫となり消えていった。

「おい道化、バーサーカーを消さずにその差を見せつけ、マスターを殺すかと思いきやつまらん最後だつたな。イラついて我が手を出してしまつたぞ」

「どうして殺したんだ……」

「殺す？ ふはははつ 何を言つてゐる。サーヴァントとは既に死人よ。死んでいるモノを殺すとは不思議な事を言つた道化。セイバーゲイいると思ったのだがな、いないのなら我は帰るぞ。ではな道化

イリヤ・スフィールは終始無言だつた。

「ガンナー！ 無事ですか！？」

「あ、マスター……戻ってきたんですね。ちゅうひ良こ、この子を

……」

衛富士郎は家に辿り着いた。

「シロウー、無事だつたのですね！？ ガンナーはどうしましたか！？」

「アイツはバーサーカーと戦ってる。セイバー頼む、一緒に来てくれないか？」

「あれ？ どうか行くのかい？」

そこにいたのは赤いコートのガンナーとバゼットだった。

「無事だつたの？ バーサーカーは！？ ……って、イリヤ・スフィール！？」

そう、そして敵で自信満々だつた記憶に新しい少女。イリヤ・スフィールは意氣消沈させて無言でヴァッシュュに手を引かれていた。

「……」

「どう言つ事？」

凛の当然ともいえる質問にバゼットは、ガンナーと帰りながら聞いた事を答える。

「バーサーカーは謎のサーヴァントの介入により殺されました。イリヤ・スフィールはその時点で脱落と言つ事になりますが、ここで保護するのが妥当と判断しました。シロウ君どうですか？」

「あ、ああ、俺は願つても無いし、イリヤともちゃんと話したかつたし……」

「せ、先輩は小さい子がその……好きなんですか？」

「はいはい、こんな時にボケないで桜。それで？ 謎のサー・ヴァン
トって誰なのよ？ 残つてるのはアサシンとキヤスターとワンサー
だけのはずよ？」

「私は見てないのですが……」

「金髪で、無数の剣を放出して来る偉そうな感じだったよ。セイバー
一ちゃんを探しているみたいではあつたけど……」

ヴァンシュのその答えに、セイバーは青ざめる。

「あ、アーチャーだと……そつ concentric ですか？」

「アーチャー？ アーチャーなら屋根にいるでしょ？ どついたの
よセイバー？」

「それは……もし間違い無ければ、そのサー・ヴァントは前回の聖杯
戦争でアーチャーのクラスだったサー・ヴァントです」

そして、セイバーの口から第4次聖杯戦争が語られた。

第07話 「HARD PUNCHER・2」（後編）

感想は隨時受付中です。

第08話 「NERO」（前書き）

眞面目ぶつて書いてみた。

fat e / zero 読みなおして書いてみた。

と言ひ訳で、今回はセイバーの過去話がメイン。

その王は、幾たびの戦場を越えて不敗。

その王は、ただの一度も敗走はなかつた。

その王は、ただの一度も理解されなかつた。

その王は、常に独り 剣の丘で勝利に酔つた。

故に、その王の生涯に意味はなかつた。

故に、その王は を求めた。

10年前。

第四次聖杯戦争は終幕へと進んでいた。

サーヴァントとマスターは残すところ一組となつていた。

キャスター、ランサー、アサシン、バーサーカー、ライダーは消え
た。

そう、残っているサーヴァントはセイバーとアーチャーだ。

聖杯は7つの内5つの魂を注がれ、黄金の輝きを放ち、勝者を待つ。

煉獄の如く燃えさかる炎の中、セイバーは歩みを進める。

バーサーカーに負わされた傷は自己再生能力で治癒できる域を優に超え、疊り一つなかつた騎士甲冑は黒い煤に汚れ、その膚は血の気を感じさせずに青ざめている。膝は軋み、足腰は震え、呼吸も荒い。それでも彼女は歩みを止める訳にはいかなかつた。全てをやり直さなければ、王の選定からやり直さなければならなかつた。

王は、人の気持ちが分からぬ

「まだだ……まだ償える……まだ、間に合つ……私には聖杯がある。運命を覆す奇跡がある……」

常勝の王は歩み続ける。

勝利の剣に縋りつき、杖の様に突き立て、歩み続ける。

人の心を汲めずとも、孤高の王と罵られようとも、そんな是非は二の次でいい。それでもその手に勝ち取つた勝利を、故郷に、臣民にもたらし得るならば…… それこそが、彼女が『王』として自身に課した機能の全てだ。

この手に聖杯さえ掴めれば、全てを償える。精算できる。

今はもう、それだけが、王としての道を選んだ彼女の全て。満身創痍の身体を引きずるよつて、セイバーは歩き続けた。

一步、また一步と進めば進むほどに気の遠くなるような痛みが襲い続ける。

よろめきながら、躊躇ながら、それでも彼女は歩みを止める訳にはいかない。責務があった。王として果たさなければならぬ誓いがあつた。そして、それを遂げるために唯一残された道は、聖杯を手にすることだけだった。だから進んだ。傷付く身体を鞭打ち、歯を食いしばって耐えながら。

そして、彼女は遂に聖杯を見つけた。燐然と輝く黄金の杯が、炎に囲まれて浮いている光景を。ああ、まさかれもなくあれこそが目指す聖杯だと。

「アイリスファイール……」

その剣に賭けて守ると誓い、そして果たせなかつた姿がそこにあつた。またしても自分は誓約を破つた。自責と屈辱の中、脳裏に浮かぶのは誓いを交わした時の彼女の言葉だった。

セイバー、聖杯を手に入れて。

あなたと、あなたのマスターのために

「……はい、せめてそれだけは、貫く。それだけが……」

今の彼女に残された、全て。

未だ彼女が勝利の剣を放さず、倒れてしまいそうな身体を起こし、呼吸を続けるのはそれを手に入れるため。ただそれだけだった。

不意に左足を貫かれる。たまらず転倒し地に伏せることしか出来な

い。彼女の前に現れるのは、ほぼ無傷な黄金の鎧を纏うアーチャーの姿だった。続々と宙から現れ出でる『王の財宝』の兵器軍が、全ての切っ先をセイバーに向け待機していた。

あとは主の号令一下で無数の剣や槍はセイバーを串刺しにするだろう。

「セイバーよ……姫執に墮ち、地に這つてなお、お前と云つ女は美しい。剣を棄て、我が妻となれ」

真っ直ぐに歪むアーチャーの告白は、しばしの当惑の中にあつたセイバーを、ふたたび怒りの虜にさせんのには十分だった。

「貴様は、そんな戯れ言のために……私の聖杯を奪うのか……」

しかし、吼えるセイバーの目の前に剣が降り、セイバーを吹き飛ばす。断り続ける彼女の恫喝すらをも愛嬌とするかのようにアーチャーの歪みは断われば断るほどに増大して行く。セイバーの傷付いた足を再度抉る。その激痛に悶絶する姿にアーチャーは声高らかに笑う。

セイバーは憤怒していた。思考は沸騰している。二の太刀も考えず、この身が消えようとも残された力、全力を乗せて『約束エクスカリされた勝利の剣』を叩きこむことを考えていた。未だ真名も知れぬ英靈ともなれば、対城宝具に抗しうるほどの防御手段があつたとしても不思議はないが、勝ち誇り油断しきつている今のアーチャーや隙だらけだ。まさか今の彼女が反撃に転じようとは思つまい。

だが、今のセイバーの位置からアーチャーを狙うと言つのなら、その射線の先には聖杯もある。例えアーチャーを一撃で仕留めたとしても、その時は聖杯もろともに焼き尽くされてしまうだろう。それ

では何の意味もない。

極限の選択を強いられながら活路を探る彼女は、もう一つの影を見つけた。

まるで、亡靈の如く佇むロングコートのシルエット。それはセイバーと契約した正規のマスター、衛宮切嗣に間違いなかつた。絶望的だつた状況に一縷の光明が射す。

強制命令権の令呪はまだ二つ残つてゐる。奇跡に等しい不条理すら可能とするあの助けを借りれば、この状況を打破できるのではないか。

今、彼女の窮状を見れば、マスターである切嗣とて、取り得る決断は一つだつう。幸いにもアーチャーは切嗣に気付いていない。そして、切嗣が右手を掲げ、その甲に刻まれた令呪の輝きを露わにする。

目の前にいるアーチャーに対抗しうる援護が得られればどんな手だらうと構わない。痛覚を遮断して死力を尽くせと言われば、セイバーの肉体は全身の負傷を完全に度外視し、身体が崩壊するまで最大限のパワーを發揮できるだらう。瞬間移動で聖杯の下まで馳せろと言われば、この致命的な位置の不利を解消し、聖杯を保護しつつアーチャーのみを葬るだけの、精妙な出力調整で『約束された勝利の剣』を放つことも可能かもしれない。それが令呪だ。マスターとサーヴァントが同意の下に行使する令呪ならば、どのような無理も押し通る。セイバーはそこに最後の期待を託す。

衛宮切嗣の名の許に、令呪を以てセイバーに命ず。

宝具にて、聖杯を破壊せよ

「…………？」

旋風が渦を巻き、周囲の炎を薙ぎ払う。解除された風王結界の中から黄金の剣が姿を見せた。

セイバーの思考が理解を拒んでも、サーヴァントとしてのその肉体は、何の疑問もなく令呪の機能を受け入れる。

「な、馬鹿な 何のつもりだ！？」

アーチャーもこれには驚きを隠せなかつた。聖杯を背にしている限り、セイバーは決して奥の手を使えぬものと、高を括つていたからだ。

「…………違うッ……」

セイバーは吼える。声も張り裂けんばかりに絶叫した。伝説の騎士王として、最優クラスたるセイバーのサーヴァントである彼女が備えていた特級の対魔力は、令呪の縛りすら瀬戸際で食い止めるほどものだった。強権と抑止、闘ぎ合つ一つの力はセイバーの中で荒れ狂い、その細い身を今にも引き裂かんばかりだった。

「何故だ！？ 切嗣 よりによつて貴方が、何故ッ！？」

有り得ない。こんな命令は有り得ない。

セイバーに勝るとも劣らず、衛宮切嗣と言う男は聖杯を必要としていた筈だ。セイバーの騎士道精神を邪魔と考え、冷酷なまでに聖杯戦争を勝ち進んできた男が、何故ここで聖杯を破壊させるのか。愛する妻であるアイリスフィールが命を捧げた儀式の成就を、なぜ今

になつて無為にするのか？

切嗣は再度右手の甲をセイバーに向けて示した。

最後に残つ

た、令呪の一画を。

第三の令呪を以て、重ねて命ず

「やめろおおおオオツ！――」

自らの誇りが、希望が、今度こそ砕け散る瞬間を目前にして、セイバーが涙を散らしつつ絶叫する。

セイバー、聖杯を破壊しろ

それは、もはや抗えるはずもない暴威だった。

重ね掛けで増幅された令呪の強制力は、泣き叫ぶセイバーの身体を蹂躪し、圧搾し、その全身からありつたけの残存魔力を引きずり出して、破滅の光へと収束させた。

アーチャーはその光の直撃こそ避けたものの、セイバーのマスターである切嗣を処刑する機を逃した。

かつてのアイリスファイールの一部であつた黄金の聖杯は、閃光の灼熱に抗うこともなく、静かに形を失い、消えて行つた。その末路を正視できず、セイバーは目を閉ざす。　今、最後の希望が潰えた。彼女の戦いが終わつた。ならば、こんな無残な結末を、どうし

て目を開けたまま見届けられようか。実際、彼女には残存魔力は無く、サーヴァントとしての肉体を維持できるだけの余力すら残していなかつた。そして勿論、契約者であるマスターもまた、彼女を繫ぎとめる意向などもありはしなかつた。

そして、現在。

「私が知る衛宮切嗣と言つ人物は、冷酷で非情なマスターでした……」

セイバーは自分の記憶に残る、前回の聖杯戦争を振り返っていた。

「親父が……」

「キリッグ……」

そう、アイリスフィールと言つのはイリヤの母親だ。つまり、イリヤは言うなれば聖杯の娘とも言えなくは無い。AINツベルンが用意したホムンクルス。聖杯の扱い手……ただ、それでも衛宮切嗣の娘であり、衛宮士郎の姉にも当たる。そんな少女は自分のサーヴァントであるバーサーカーを、前回の聖杯戦争から存在し続ける謎のアーチャーに消された。

バーサーカーは……強いね

彼女を守護した狂戦士はもういない。最強のカーデで消す側にいた少女は、消される側に回っていた。そして、重苦しい空氣の中。バゼットは淡々と事務的に現状と今後を考え口を開いた。

「そのサーヴァントはイリヤスフィールを狙つて来る可能性もありますね」

「そ、そうね……でも、そのサーヴァントがどこにいるのかなんて分からぬし……当面はキャスターとアサシン。もしくは綺礼を攻めるか……」

真面目な話をしている自分のマスター や凛を余所に、ガンナーは縁側で頬に涙を流していた。何故、この聖杯戦争と言つものはあるのか。願いを叶えるために人の命を奪うのか。仮にサーヴァントだけの命だけで済む聖杯戦争だつたとしてもヴァッショ・ザ・スタンピードという男は納得しきれないだろう。

「 聖杯という願望器はそう言つものだ。魔術師にとつて最大の帰結ともいえる到達点だ。であるならば、自分を除く全てのサーヴァントは殺した方が良いに決まっている。まあ生糞の魔術師なら自分のサーヴァントも令呪によつて殺すだろうがな」

願いを叶える万能の器、聖杯。それをより良いモノに仕上げるならばサーヴァントの命は奪つべきだ。そして、それに巻き込まれてし

まうなら人の死も仕方が無い。上から聞こえてくるその声は屋根で策敵を行い続けているアーチャーだった。

「そんな簡単に言わないでくれ。誰も死ななくて良い方法があるはずなんだ」

誰にも人の命を奪う権利なんてない。

それはヴァッシュが教わったとても大事なことだった。

人間の醜い面を幾度となく見て、時には殴られ、斬られ、撃たれて命を他人の命を守つてきた男の身体は傷で出来ているようなものだ。肉は抉れ、ボルトや鉄で補強され、左腕は義手。その傷は無駄なモノだと彼の同族は言った。人間を守つてどうする。アレは身勝手で醜悪で不完全な存在だと。そんなモノに優良種であるお前が傷を作る意味は無いのだと。

「貴様は……いや、何でもない」

そう言ってアーチャーは話す事を止め、再び夜の闇に視線を向けた。ヴァッシュはバーサーカーと戦っている時の事を思い出していた。常人には狂戦士の叫びにしか聞こえないその声を。

「私を相手に手加減をして挑んでくるとは……実は私の命は12個あるぞ」

「それでも僕は殺さない……」

あの時、ヴァッシュは手を下さなかつた。狂戦士でさえも話せば分かり合うと思ったからだ。無理だったとしてもマスターであるイリヤスフィールをと思っていた。どこまで行つてもヴァッシュの考えは変わらない。しかし、別の手が下り、バーサーカーはこの聖杯戦争から消えた。ヴァッシュは両手で顔を覆い嗚咽を噛み殺していた。

「なあ、そもそも何で親父は聖杯を壊したんだ」

「分からぬわ。セイバーの話だけだと、聖杯は手に入る直前のマスターだった筈よ。でもそれを壊すなんて……考えられないわ」

誰もその答えを出せる者はいない。聖杯が願いを叶える。それがどう言つ事なのかを理解していないからだ。衛宮切嗣が聖杯を破壊させたのは、聖杯の本質を知ったからだ。魔術師からすればそれは大罪だ。しかし聖杯を真に理解している者であるならばその行為を咎められる者がいるだろうか。理解して尚も聖杯を求められるのだろうか。

「ガンナー……あなたの意見を聞きたい。私とシロウが凛と休戦協定を結んだのは確かですが、ライダーを迎え入れ、バーサーカーのマスターまで連れてきた貴方には責任がある。今後はどうするのか。それを聞かせて欲しい」

セイバーは切り替えて言つ。

ガンナーは涙を拭い、振り返る。

恐らくその場にいた者はガンナーの涙に気付かなかつたであらう。

「僕は、キャスターさんとアサシンを止めるべきだと思つ」

そして、ガンナーは的確な判断をしていた。

最も危険とされていたバーサーカーが消えた今、こそこそする必要は無くなり、表立つて人の命を吸い取るというサーヴァントに狙いを定めていたのだ。言峰をマスターに構えるランサーはあれ以来見ていないし、謎に包まれた2人目のアーチャーも対応のしようがない今、アサシンとキャスター。これが最も狙いややすい敵と言えた。

「そうだな。やつぱりもう一度 柳洞寺に行くのが良いな」

「そうね。でもガンナー、また説得とか考へてる?」

「…………うん…………まあ」

「『まあ』じゃ困ります! サーヴァントとして召喚された以上、戦わずして何としますか!—」

いつもの会話の流れが出来たと思われた。

しかし、イリヤスフィールはガンナーに疑問を投げた。

「ガンナーはどうして戦わないの? ううん、別に戦わない理由は良いわ。貴方の過去を教えてくれる?」

現状、真名が知れているサーヴァントは脱落したバーサーカーを除いて、ランサー・アサシン・キャスター、そしてガンナーの4名だつた。凜のサーヴァントのアーチャーは記憶に障害があり、まだ思

いだせないと呟つ。もう一人の前回の聖杯戦争から存在してしまつてゐるアーチャーと思われるサーヴァントは不明。

ランサーはケルト神話の大英雄クー・フーリン。宝具は、必中必殺の呪いの槍を使用して因果を逆転し「敵の心臓に命中している」という事実（結果）を作つた後に攻撃（原因）を放つ対人宝具「刺し穿つ死刺の槍^{イボルク}」と、この槍の呪いの力を最大解放し投擲して使用する対軍宝具「突き穿つ死翔の槍^{ゲイボルク}」。魔術にも秀で、18の原初のローンを習得しているが、直接的な戦闘を好むため、使用することは稀なサーヴァントだ。

キャスターはギリシャ神話に登場する裏切りの魔女メディア。魔法こそ習得していないものの、魔法に近いレベルの神代の超高等魔術を平然と扱い、魔術師としての能力は魔法使いと同等、もしくは上回るというレベル。しかし大抵のサーヴァント、特に三騎士のクラスに召喚されたものは対魔力を備えているため、魔術が主な攻撃手段となるキャスターは全サーヴァント中最弱と言われる。そのため、策略を巡らして着実に力を蓄えている。

アサシンは佐々木小次郎。宝具を持ち合わせていないが、ひたすら磨き抜かれたその剣技は「多重次元屈折現象^{キシュア・ゼルレッチ}」と呼ばれる魔法域（第一魔法の一種）の事象にまで高められ、『まつたく同時に』三つの斬撃を繰り出して敵を斬るという必殺の『燕返し』を編み出すに至つた。

真名が知れるとはつまりそう言つ事だ。
情報が漏れる。

得意分野は。

弱点は。

しかし、このガンナーのイレギュラーのクラスに身を置く男、ヴァン・シュー・ザ・スタンピードには情報が全くない。

「あら、イリヤ。戦うサーヴァントもいないのに情報収集かしら」「いいえ、ただの興味よ、凛。私のバーサーカーを殺そうと思えば殺せたはずなのに、このサーヴァントは手加減しながら戦っていたのよ。名前だけ分かっても、どう言う生き方してきたのかが分からないと、納得がいかないわ」

「……何も面白くなんてないよ。む、ドーナツでも食べてや……」

ヴァン・シューはセイバーだけでも味方に付けようとするが、用意していた切り札はいつの間にか瞬殺されていた為、今回ばかりは叶わなかつた。ここにいる全ての視線がヴァン・シューに集中している。

マスターであるバゼットも止めない。止めなければ自分のサーヴァントの情報が漏れると言うのに彼女は気にせずに同様に興味を持っていた。仮に止めたとしても情報を引き出す事は出来ないとも踏んでいた。一度は言峰の騙し打ちに脱落したバゼット自身、聖杯は手に入れられればラッキー程度に思っているため、今の興味はガンナードに移っていた。

確かに不思議ではない。ガンナーと戦うイレギュラー・サーヴァントが召喚され、最速・最優・最狂のサーヴァント達をことごとく負かしてきた。真名は分かっても情報は無い。興味関心を引かれない訳がない。しかして確かに不思議ではある。生前の彼はどういった人間だったのか？

イリヤスフィールは改めて聞きなおす。

あなたはどんな英雄にんぎょうだったの？

ヴァッシュ・ザ・スタンピード

感想は隨時受付中です。

そして、次回は彼の過去がメインとなる……んじゃないかな。

第09話 「ヴァッシュ・ザ・スタンパーード」（前編）

今回のサブタイトルは本編で変わります！
ルビが振れると良いんですけどねw

あ～今日は長いよ。

それにTRIGUNキャラが出ててくる出てくる。

今回は割と真面目。あ、前回もか……まあ最後の方で崩しましたけどねw

では、張り切ってビーザー。

第09話 「ヴァッショ・ザ・スタンピード」

第09話 『人間（パケモノ）ではなく化物（ヒシゲン）だった男』

あなたはどんな英雄（ヒンゲン）だったの？

ヴァッショ・ザ・スタンピード

イリヤスフィールのその質問にヴァッショは身を縮めた。

「た、楽しい話なんかじゃないよ……」

一筋の汗がガンナーの頬を伝う。

「……あ、あーっ！ もつこんな時間だ早く寝ないと… 明日の限定50個のスペシャルドーナツを買いのがしちゃうよ… あ、お

風呂先に貰つよ。じゃー。」

「あ、ちよつとガンナー……。」

そもそも「ヴァッシュ」は行つてしまつ。話を振つたイリヤスフィールはお茶を飲んで別段気にしない様子だ。

「イリヤスフィール、自分で話を振つておいて止めなくて良かつたのですか？」

セイバーの疑問にイリヤは余裕の笑みを浮かべて片眼を開く。

「別に言つてくれるとは思つてなかつたわ。ずっと一緒にいたこの誰にも言つてないんじょ？ なら言つ筈はないと思つてたわ。でもね、聞く方法は彼の本心からじゃなくてもあるの」

それは非人道的な話だった。衛宮士郎と間桐桜を除いたここにいる者はそれに気付く。『魔術』を使すれば記憶を見るのは可能だ。勿論、対象が抵抗しなければの話なので、彼が眠りについてからという事になる。

「で、でも……起きるでしょ普通……」

「あら、失敗してないと思うけど？ ガンナーのマスター。ガンナーの対魔力はどの程度なのかしら？」

「……ほんと人のソレです。攻撃などの魔術は回避できるそういうので問題ないほどですが……寝ている時などは無抵抗に等しいでしょうね。何か仕掛けていたのですか？」

「あとは凛。あなたが宝石を人数分 提供してくれるだけで良いわ
」
「ああ……そういう事……良いわ。私も興味があるしね。それぐら
いの出費で済むなら安ものと割り切るわ」

そして、深夜になった。

パタンッ

「どうでしたか凛」

「問題ないわ。信じられないぐらいグッスリ寝てるから。念の為に
軽く蹴りも入れてみたけど大丈夫みたいね。でも……」

宝石を幾つか持つて出てきた凛は、ヴァッシュの部屋から出てきた。
宝石にはヴァッシュの記憶をコピーした宝石がある。成功して浮か
ない顔なのは、寝間着から覗いていた足や手の傷が脳裏に浮かんで
いるに他ならない。最速のサーヴァントを更なる速さで退け、最優
のセイバーの懷に一瞬で入りドーナツを突き出し、更にバーサー
カーをも生かそうとしたサーヴァントだ。何故あのような深く抉れ
た傷を負うのか。それだけが彼女の疑問だった。そして、それは手
に持つ小さな宝石を呑みこんでしまえば理解できる」とではあった。

「……これを飲むんですか？」

「そうよ。身体の中に入ってしまえば溶けるわ。それが情報となってアイツの過去が分かるようになってるわ。もちろん全てじゃないわ、結構飛び飛びのはずよ」

宝石を飲んだ事が無い上に、宝石魔術の知識が無いに等しい桜は宝石を見つめて信じ切れずにいた。それを尻目に 魔術回路作成のために宝石を飲んだ事がある士郎は人数分のお茶を居間で用意していた。

「ほら、アーチャー。アンタも降りてきて飲みなさいよ」

「……ああ、分かった」

砂漠だ。砂漠が見える。

砂漠を走る列車に、町の中心部に存在する巨大な電球。

この星の人間はどうやらこの電球の力で生きているようだ。この電球が、今の現実で言うところの電気・ガス・水道などを生み出す役割をしているようだ。どうやら【プラント】というモノらしい。

そして街にはガンマンと呼ばれる様な人達。賞金稼ぎ等の荒くれ。それらが集う酒場。まるで西部劇のよつにも見える。当然ながら普通の生活をしている人もいる。

そして、意識は深層心理へと向かう。

体は傷で出来ている。

血潮は砂で、心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただ一度の敗走もなく、

ただ一度の勝利もなし。

彼の者は常に独り砂漠の荒野で人を信じる。

故に、生涯に意味はなく。

その体は、きっと無数の傷で出来ていた。

『ヴァッシュ・ザ・スタンピード』という男の話をしよう。

ああ いや、その前に聞かせてくれないか。悪人と善人がいて、君ならどうする。君の手には拳銃という武器がある。相手は丸腰だ。

仮にこの状況下で誰を殺したとしても罪には問われないとしよう。
さて、君は誰を殺す。悪人を殺すのかい？ どうして？ ああ その通りだ。ソイツは悪い事をした。死んでも誰も困らない。逆に誰かに感謝されるかもしれないね。おや？ そつちの君は善人を殺すのかい？ ああ そうだね。君と同じように、何故殺されるのか泣き喚いて逃げ惑う姿に終わりを与えるのも面白いと、そう考える人もいるだろうね。

しかしだね。彼はどちらも殺さないのさ。もし仮に君達のすぐ近くに彼がいるとしたら、その身を呈してでも、銃弾を受けてでも誰も死なせないようにするのさ。そう、これから話すのは、彼が何故そういう男なのか、どのように生きてきたのか。まあそういう事かな。

最初の怪我はいつだつただろうか。そんな事も思い出せないほどに彼の傷は無数にあり、酷いとしか言えないものだつた。彼は同族であるナイブズと一緒に生まれた。両親などいない。たまたまそこにいた人間に育てられた。しかしヴァッショは、たまたまそこにいた『レム・セイブレム』という女性から大切なことを教わつた。ああ、レムつて言うのは、ヴァッショ達の母親のような存在だ。独自の強い信念を持つていて、命を賭けて誰かを守ろうとするその献身の姿が、後のヴァッショの行動原理となつていてるようだ。

ある日、幼い頃の、ヴァッショは蜘蛛の巣に囚われた蝶を見つけた。蜘蛛はゆっくりと蝶に近づき、捕食しようとしている。彼は手を差し伸ばし蝶を助けようとする。そこに割り込むように伸びてきたのはナイブズの手だつた。その手は蜘蛛を握り潰していた。ヴァッショは泣いた。「どちらも助けたかった」と。しかし、ナイブズは言う。「蝶を助ければ蜘蛛はお腹を空かせて死んでしまう」と。それ

に対してレムは「そんなに簡単に結論を出しては駄目」だと叫ぶ。最良の手段があつたはずだと。

誰も……人の命を奪う権利なんて無いわ

命の大切さをヴァッシュは知る。その先も人の命の大切さを知つて行く。しかし、ナイブズはそれが煩わしかつた。弱肉強食。それが簡単にナイブズという男を一言で表せる言葉なのかもしれない。優秀な者が生き残り、弱い者は死んでいく。そしてナイブズは人とうう存在を多く消した。多く殺した。自分達の方が遙かに優秀だと信じて。

ヴァッシュ！ ナイブズを……！！

レムの最後の言葉を刻み、大人になつたヴァッシュはナイブズを探す旅に出た。

【第3都市ジユライ】

「いらっしゃい派手な服だね。芸人さんなんだろ。はいよリンク6個で3\$\$\$」

「アイスだ！ 私が命じたのはアイス！！ アンタは新入りなんだからちゃんと…！」

「勝手に連れて行くな！ そいつには厨房を手伝つて貰うんだよ！」

さあ喰つたぶん働きな！」

「あつくそババア人の子分を！！」

赤いコートの男は子供と戯れ、平和な日々を過ごす。

「ああ、アンタの探してた人な。戻つて来るの4日後だそつだよ」

「あの『デカい屋敷で何やつてるんだかな」

「あ？ なんだよ用がすんだらもう行つちまうのか？」

「俺達の団は簡単には足抜け出来ないぜ」

「あなたつてもう何年もここに住んでいる様な感じよね。名前は？」

「ヴァッショ？」

「変わつた響きねえ」

「ヴァッショ……」

「ヴァッショ……」

赤いコートの男は探し人を見つけた。しかし……

「よおヴァッショ」

血まみれの探し人と、小さい頃に別れた男がそこにいた。

「100年近く人間どもの中で生きてきて、お前一度も人間に對して憎しみを持つた事が無かつたのか？」

「……やめろ」

「嫌だね。大事な話だ。見た時は絶句したぜ。その身体中の痕、何度裏切られた？ 何度傷付けられた？ 何度嘘をつかれた？ 何度

屈辱を受けた？ 人間扱いされなかつたことは？ 大切なものを奪われた事は？ いわれなく疑われた事は？ 笑われながら踏みにじられた事は？ ……現実を凝視しろ。お前は矛盾だらけだ。綺麗事と痩せ我慢の生き方がお前の心を蝕んでいるんじゃないか？」

ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロ
ヤメロヤメロヤメロヤメロ

「亞阿あ睡ア？ あ亞あアアア――ツ――！」

最後に彼と出会つた時の記憶は消えた。そう『第3都市ジュライ』と共に。ヴァッショは『第3都市ジュライ』を『ロスト・ジュライ』へと変えた悪魔の使いとして賞金首となつた。幸いなのか死者は出なかつた。その代わり、ジュライは人の住める場所では無くなつた。

全てを失つた人は殴り、奪い、罵り合つた。だから瓦礫の高台で聳え立つっていた彼を見た者は彼を犯人だと決めた。実際そうだつた。操られるように制御が出来ない暴威にヴァッショはその光を地上に放つたのだ。

ひとりたすければ
ひとりうまれしたことになるのか

そのいのちは
よい いのちか

レムをなくし
独りになつて
ここの中の彼女が微笑うよつ
あるく

その生き方が確信になつて
ゆらいで
喜びの涙と哀しみの涙

幾千万の銃弾の中
痕はふえて

そして たどりついた場所は
歪みが導く 更なる絶望

わすれようとしていたこと
封じようとしていたあやまち
とりかえしのつかないこと

助けた命はいくつだつただろうか
救えなかつた命はいくつあつただろうか
救つた命に間違いはなかつただろうか……

「そんな事は分からない！ 分からないよ！
言える。僕が消してしまつたの人たちは

でも……これだけは
優しかつたんだ……

…

そして、ここに600億\$\$の賞金首、『人間台風』ことヴァッシュ・ザ・スタンピードが手配書にて世に知れ渡つた。彼が歩いた後にはペンペソ草の一つも残らない。街を灰に変える悪魔の使い。人の形をした化物。そう、彼は人間ではない。この星で生きる人にとつて必要なプラント。その自立種だ。その能力は人間を遙かに凌ぎ、何年も何十年も何百年も生きられる存在であり、人間と比べると老化というモノが無いに等しい。いつまで経つても見た目20代の優男は150年以上生きてきた化物だった。

ナイブズは同胞であるヴァッシュを人間であるクズと一緒にさせるために苛立ち、ヴァッシュを無理矢理にでも自分の手元に置こうとした。魔人と呼ばれる、人間でありながら人間を超えている殺戮集団を刺客にして襲わせた。彼の目的はヴァッシュとは対極にある。人類の抹殺マシナシだつた。ゴミが消えれば同胞だけの世界が出来上がる。ただ、それだけだつた。

後にナイブズの居場所までの案内役だと分かる男である『ニコラス・D・ウルフウッド』は牧師と名乗る。孤児院の真似マジナシごとをする彼は何人も殺してきた。ヴァッシュの生き方にも理解できない事が山ほどあつた。何故笑うのか？ そして、何故その笑顔は空っぽなのか。人を不安にさせる笑顔だつた。それが苦笑いとかであつたならどれだけ楽だろうか。それほどヴァッシュの笑顔はウルフウッドにとつて空っぽに見えた。

「ええかトンガリ。こないな時代やと人生は絶え間なく連續した問題集や。揃つて複雑。選択肢は酷薄。加えて制限時間まである。一番最低なんは夢みたいな解法を待つて何ひとつ選ばない事や。オロオロしてる間に全部おじやん。一人も救えへん。……選ばなアカンねや！一人も殺せん奴に1人も救えるもんかい。ワシらは神さまと違うねん。万能やないだけ鬼にもならなアカン……」

「……ウルフウッド……でもやつぱりそれは言葉だ。今そこで人が死のうとしてる。僕にはその方が重い」

時には衝突する事もあつた。

「何故撃つた！？ ウルフウッド！！ 彼に撃つ氣はなかつた！！」

「トリガーに指が掛つてもか！！ いい加減にせえ！！ お人好しにも程があるわ！！ ……しゃ あないやろ 誰かが牙にならんと誰かが泣く事になるんや……」

自分が狙われていたとしてもヴァッシュは殺した方を責める。それほどまでに真つ直ぐな男だつた。その男の背中を何度も守つてきたウルフウッド。何度も知られぬところで殺してきた。そして、自分が窮地に立たされた時、彼の一途な思いを顧みた。

「わかつてゐる。わかつてゐるがな あいつは馬鹿や。いつてゐる事は現実を見ないガキのたわ言や。大馬鹿や。そんな事わかつとる。でもああ。でも……でも……あいつは一度も言い訳をせえへんかつた」

そして

「笑えトンガリ…… おまえはやっぱり笑つてゐるほつがええ カラ
ツボなんて言つて 悪かつた……」

彼もまた逝つてしまつた。

大事なものをいくつも失つてきた。彼の身体は言つまでもなく傷だらけ。しかし、ナイブズのいる場所に行かなければならなかつた。レムの最期の言葉だけが彼を突き動かしていた。

ヴァッシュの左腕は義手だ。その左腕はナイブズによつて奪われた。そして、その腕は野に捨てられたかと言つと、それは違う。ここでもう一人紹介しよう『レガート・ブルー・サマーズ』という男だ。何故この男を紹介するかと言えば、この男がヴァッシュの左腕を移植されており、ナイブズに忠誠を誓い。そして、ヴァッシュの心を一度は粉々に碎いたからに他ならない。

この男の怖い所は感覚を持たせたまま他人を操り、人間の出せる限界まで弄る事が出来ると言う点だ。例えば、これは実際やつた話だが、車が一台あつたとする。密閉された荷台には恐らく入れても6人が限界という広さに、数十名を操つて入れて行く。車の下からは真赤な液体が流れ続け、上からはこれから入れられる者の悲鳴がこだまする。当然感覚はあるわけだから、無理矢理に押し込まれ、骨が軋み折れる。骨が内臓を突き刺し皮を破る間も痛みは続いている。

そう言つた事が冷静に出来る男であつた。

彼の使命は『ヴァッシュ・ザ・スタンピードに永遠の苦しみを与えること』だつた。レガートはヴァッシュに「自分の意思で僕を殺せ」と言つ。そう、レムの命を大切にする考え。それを行動原理にし、不殺を心に150年以上も生きてきたヴァッシュにとつてそれは残酷以上のなものでもなかつた。「引き金を引かないと、君の大切な人が死んじゃうよ?」と、人質まで取りレガートは引き金を引かせた。レガートは歪み微笑つて逝つた。

「人を殺したんだ……もう駄目だ……レム、どうしたらしいのレム
教えて……僕はどうしたらいいの?」

壊れた硝子。

その姿に伝説の面影はなく、尊厳も見当たらない。コレは本当に人間台風マゾイド・タイン・ファンなのか? いつもの笑顔も思い出せないほどにやつれ泣き喚いた。撃つ相手の急所を外し、掠り傷でも手当まで施す優男はあの日、レガートの頭部をゼロ距離で撃ち抜いた。

人間は止まらなかつた。

人間とは理性がある者。理性があると言つ事は。理性の罠たががあり、それが外れると言つ事。そして、この世界に生きる者の罠は外れやすい。それ故に人間は命を軽んじる事がある。大事な人を殺されば奪い返す。それが当たり前だと。殺されれば殺す権利が生まれると言つ結論に至る人間が多い。

それ故に。

「俺の友人は何故死んだ！　お前がジュライを！！」

「あんな惨い事をしてお前はのうのうと生きるのか！？」

「死んで償え！！」

弱り切つた男を車で引き摺り回し、傷めつけ、殴打し、何度も何度も繰り返す。ヴァッシュは何も言わない。ただ。今までの事は自分がやつたと、自分はヴァッシュ・ザ・スタンピードだと言つだけだった。

「やめて下さい！！　この人はそういう人じゃありません！！」

そうだ。全ての人間が悪いんだつたら滅んじまえと思うよ。ナイブズが正しいってな。そう、止める奴もいるのさ。彼女の名前は『メリル・ストライフ』ヴァッシュを保険の仕事で追いかけて回していた人間だ。最初は彼女も「これが伝説のガンマン？」と真面目に疑つたものだ。ドーナツを頬張り垣根無しに笑う男。あらゆる事件は、手段はともかく死人無しで解決して行く男。そう、そんなヴァッシュって男は、初めて自分の手で人を殺してしまった。落ち込む彼には怒りをぶつける人間がいて、レムと同じ事を言うメリルは、怒り狂い理性を無くしかけていた人を止めた。

「誰も……人の命を奪う権利なんてありませんわ」

人はやり直せると。生きていればやり直せると彼女は言う。ヴァッシュはその言葉に何かを見出し、最後の場所へと向かった。何人も死なせ何人も裏切ってきた事を重く受け止め直し、未来への切符はいつも白紙だと言う事を彼は思い出したのだ。

ヴァッシュ！ ナイブズを独りにしないで！！

大きい十字架を背負つてきた紅いコートの同族にナイブズは聞く。

「楽しかつたかい、人間として生きて？」

そのコートの下には、あれからどれほどの傷が増えたのか。

無駄だとは分からなかつたのか。

僕らは人間なんてモノに使われる存在ではない。

それを自然な表情で聞く。

答えは分かつていてる。

目の前の男は何度も言う事を聞かなかつた。

こいつをこいつしてしまったのは、レム。お前の所為だ。

そして、深紅のコートの男は自信を持って答える。

「ああ、最高だつたとも

間違いなんかじやない。

間違いなんかじやないんだ。

一人の空氣はとても穏やかだ。

そして、ヴァッシュは銀色の銃を抜き、ナイブズに向けて撃ち放つた。

その銃声が決戦の火蓋を撃つて落とした。

意識は覚醒する。

「う……ん

「起きたか遠坂……ほら」

士郎はティッシュ箱を差し出す。そこで初めて気付いた。自分が泣いていたのだと気づく事に。周りを見渡せば凛が最後に覚醒したらしい。誰も彼もが黙つたままだ。涙を拭つ桜がいる。腕を組んだまま柱に寄り掛かるアーチャーがいる。湯呑を握つたまま顔を伏せているバゼットがいる。時計を見れば午前5時過ぎ。数時間の出来事だつたようだ。

誰も見たモノについて喋ろうとしない。語ろうとしない。
少しして、口を開いたのは家主だった。

「人間じゃなかつたんだな……いや、そつまつんじゃなくて……何て言つたらいいのか分からぬいけどさ……」

「憧れたか」

いつものアーチャーなら鼻を鳴らす動作も付け加えたであろう。しかし、そこには侮蔑や憐れみ等はなく敵視もなかつた。そうだ。それはきっと憧れだ。人間以上に人間らしい男。理想を具現化した男だつた。全てを救うヒーローだ。少なくとも衛宮士郎にはそう映つて見えた。

「凛、少し良いか」

アーチャーは朝日の昇りきらぬい寒空の庭に呼んだ。

「何よ?」

涙を拭つた凛にアーチャーは謝罪した。

「私は元より記憶は失つていなかつた」

「……どういふ事?」

「私の真名は……【エミリヤ】だ」

「え……エミリヤ?」

それは衛宮士郎の未来を具現化した存在。英靈エミリヤ。投影魔術を

使い、剣技は我流。見てきたモノに苦しみ、自ら衛宮士郎を殺す事を決めたエミヤシロウだった。しかし、目の前の男は全てを告白した。仕切り直すと。そう言った。

「アーチャーが士郎……信じられないけど……うつん。投影魔術に同じ夫婦剣。でも、どうして？」

「なに、あの傷だらけのバカの過去でどうでもよくなつた……精々殺さないよう協定を結んでいる内は守り続けようじゃないか。鍛え直さんといけないだらうしな」

初めてアーチャーの殊勝な心掛けが見えた瞬間だった。

不意に足音と、少しして洗面所の方から水道の流れる音がした。そして、居間に顔を出したのはこの家に住む最後の一人、ガンナーだった。

「あ、あれ？ み、みんな早いね……もしかしてみんなもドーナツの限定で並びに行くのかな？」

「ガンナー。申し訳ありません」

マスターであるバゼットは頭を下げる。他のマスターも頭を下げる。下げるのはセイバーを除くサーヴァントであるアーチャーとライダー。そしてイリヤスフィールだけだった。

「ま、マスター？ み、みんなも？ どうしたの？」

「勝手ながらあなたの記憶を見ました」

「……そつか……あー、ね？ 楽しくなかつたでしょ？ なはははは～……」

「どうして笑つていられるんですか……全くあなたは、怒らないのですか？」

拍子抜けしたバゼットは頭を手で押さえている。

「ガンナーラシ」と言えればラシにけどね……傷、見せてくれない？

「い、つ！？ ぬ、脱げと仰いますか！？」

「違つわよバカ！……ただの興味よ

「私も多少は気になります」

「わ、私は少し怖いんですけど、見たいです……」

「目が怖い！ ちよつ！ ライダーちゃん！？ セイバーちゃん！？ 何故に抑えつける！？ 見てないで助けてくれないか君い～！」

「む、無理だ」

「ああ、無理だな」

士郎とアーチャーは一步引いて後手に回っている。

「ノオオオオオオ～～～！！」

数分後、関節技などで苦しんだヴァッシュは仕方なく上だけを脱ぎ、言われるがままに、ヴァッシュは左手の義手も外した。興味津々でマスター陣、サーヴァント陣はその傷だらけの傷を見る。しかし一人だけ、その輪に收まらずお茶を飲みながら遠目に眺め見る者がいた。

興味がある。しかしそれは、ただ見たい。という感情からではなく、ヴァッシュの過去を見て、その結果である傷を見て、改めてガッナーレと言つて、ギューラーなサーヴァントを植踏みする様な眼であった。

第09話 「ヴァッシュ・ザ・スタンペード」（後書き）

感想は隨時受け付中です。

- ・宝石魔術でこういつ事が出来るかなんて知らない。知った事か！
- ・アーチャーの記憶が最初から問題なかつた？ そんな事知るか！
- ・この話を書くにあたつて、TRIGUN全巻マキシマムも合わせて買い直しました。そんな事知るか！！ DVD BOXも最後まで見たわ！ 書きたい事まだまだあつたわ！！ でも知るか！！

さてさて、またおふざけモードに戻つたかと思ひきや、誰やねん！
輪に入らずに踏みしてゐ奴は！！ 想像にお任せする！！

あー疲れた。何日使つたよ この話にw

第10話 「聖職者」（前書き）

「ここに来るのも4か月ぶりっすかね……。

や、やつは……。

うむ、返事無し……！

いまだ必殺！ 隠れて投稿……！

「やあ」

「あなたは……」「いやでやる気?」

「一緒に食べない?」

サーヴァントであるガンナー。ヴァッシュ・ザ・スタンピードは大きい紙袋に大量に詰まったドーナツを一つ私服のキャスターに差し出す。キャスターは怪訝に思いながらも、受け取るだけ受け取つた。口にはしない。毒が無い事はすぐに分かつた。それでもキャスターは口にしなかつた。

「どうこうつもりかしら?」

「ん……ちょっとね。マスターたちに過去を見られかけてしまふ、少し落ち込んでるのボク。ヤケ食いに付き合つてよ」

「筋違いねボク。これ一個だけよ?」

少し鼻を鳴らし、キャスターはドーナツを千切つて食べるようにな、小口分を摘んだ。

「……君は自分のマスターが大事だろ?」

「当然ね。誰でもそうじゃないかしら? 自分のマスターが死んだら自分も危ないんだから、大事に決まつてるわ」

「ん~、でも君の場合、もう少し特別に見える……どうかな、多分戦わなくても良いと思つんだ僕達」

キャスターは正直驚いた。もちろん表面には出さない。そして、またマスターとサーヴァント以上の関係と見られた事に嬉しさすら覚えていた。しかしそれは。

「 無理ね。私の見立てが間違つてなければ、あなたはあの可愛らしいセイバーと同じタイプのサーヴァント。騎士道なんて持ちだして来ないでしようけど、似てるわ。そして私は、あなた達が許せない行為をして生きながらえている悪いサーヴァント。ケンどちらかが死ななきや解決しないわよ？」

「まじね？」 そう言わんばかりに肩を竦めてキャスターはもう一口分千切る。

「それも考えてきたんだ。それが魔力供給の話なら、マスターと関係をもてばいい」

「はあ？」

ヴァッシュはキャスターにマスターとの性行為を勧めた。マスターとの関係も更に深いものとなり、魔力も供給される。わざわざ他人の命を奪う必要もない。その言葉にキャスターは少し考え、真っ赤になつて千切つたドーナツを落としてしまつ。

「な、なナななんて事を言つのよー？」

「僕は人が死ぬのが苦手だ……過去を見られたと聞いて、僕も少し

思い出しちゃってさ……やつぱり戦いたくないんだ。君が関係の無い人たちの命を奪っているのも辛い」

赤面したキャスターを余所に、ヴァッショは冷静にドーナツを口に運ぶ。

「……本当にサーヴァントらしくないイレギュラーね……条件があるわ。でもそれでも戦うしかない場合もある。どうかしら？」

「条件つて？」

「私にもあなたの過去を見せなさい。それで判断するわ」

「酷いな……結構つらいんだぜ？」

「戦うのだつてつらいわよ。選択肢があるだけ良いんじゃないかしら？」

後田。セイバー・シロウ＆アーチャー・凛を傍に置き、監視下の下、キャスターはヴァッショの記憶の宝石を飲み込んだ。キャスターは意識を手放し、眠りに落ちる。この間に討ち取れば、と考えるのが普通のサーヴァント・マスターというモノだ。しかし、最たる異常者がそれを阻む。キャスターも絶対的と言つても良いほどにこの異常者を信じた。この異常者は疑われる事があつても疑う事を知らない異常者だと。嘘は吐けないモノだと信じた。

「ホントに、あんたは何を考えてるのよ……」

「全面的に同意です。ガンナーこれは戦争なんですよ？　いい加減にして貰いたい」

「でもさ、戦争だからって戦わなきゃいけないなんて悲しいだろ？　誰だつて痛いのヤじやん？」

苦笑いを浮かべながら首に手を置きヴァッシュはそう言つて放つ。過去を知つてしまつた以上、それ以上深く突つ込む事はその場にいる誰にも出来なかつた。

ガラツ

「ガンナーここにいましたか……つてキャスターじゃないですか！？　気配も無く戦つっていたところですか！？」

「あ～、違うんだバゼット。ガンナーが連れてきてさ……」

「ガンナーの過去を知りたいんだつて……。もう、聖杯戦争つてなんのよ……」

「場合によつては、キャスターもこの戦いから退いてくれるそうです」

「……」

シロウは少し慣れてきたのか、いや、自分と同じような考えに元々共感している節はある。周りの凛などがジト目で見てくるので苦笑いになつてしまつている。

凛は家名を背負つてきたし、父親が前回の聖杯戦争で敗退した事もあり、ガンナーに対し常に困惑を抱いている。もちろん、ガンナーのやり方に賛同してしまつ点も少なからずある。言峰のこともあります。この戦いで最も悩んでいるのは彼女かもしね。

セイバーはマスターであるシロウの言葉に従つだけだ。口出しあ

する。でも強制はしない形をとっている。ちなみにドーナツを食べ始めたので口出しありも出来なくなつた。

アーチャーは寡黙だ。シロウを殺す目的を除外し、ただ、目の前の男のやり方に興味がある。と言つたところだらうか。自分が出来なかつた事をこの男は平然とやつてのけるのだらうかと……。マスターと同じく考える男ではあるが、悩むといつよりも、疑問を持つところといひだらう。

「ガンナー……」

「「めんなさい！」「めんなさい！……あれ？ マスター？」

こつものよひマウンタを取りに来ないバゼットに疑問を覚え、ヴァッシュコはバゼットを見据える。そして、バゼットはその疑問に答えるよひに溜息を一つしてから口を開いた。

「今一度明らかにしておきたいガンナー。聖杯で叶える夢はありますか？」

「僕にはないよ

「バーサーカーは脱落しましたが、気持ちは変わりませんか？」

「……うん

更に溜息一つ。バゼットは完全に諦めた。このサーヴァントと出会つたから今まで感じてきたモノが確定され固定され排除することは叶わぬ、更に言つとするならば、バゼット自身もそれでいいと思つてしまつてゐる。

根源に至る。そのための願望器。

そんなモノは必要ないと。

キャスターが目が覚めると夕方へと陽は傾いていた。

「ど、どいでじょう?」

ヴァッシュはキャスターにゴマすりをしながら返答を求める。

「……手伝わないわ。干渉もしない。終わりを静かに待つだけ。それでいいかしり?」

「十分です御主人様あ!!」

「あなたのマスターは私です!!」（ギュギュ……）

「「めんなさい」」「めんなさい」

「本当に不思議なサー・ヴァントね……飼つておきたいわ

「ヴァッシュ」

「ワッ!!」

「ノオオオオ～～～～～～」

ズシャンツ～～～～

「ガンナー静かにしてください～」

「つるさいわよ～」

「ボクだけつか～？」

イリヤダイブを辛うじて受け止めつつ、多勢に怒られるサーヴァントがいる。そして、先ほどキヤスターを玄関で見送ったサーヴァントとマスターたちは、最後とも言える作戦会議を始めた。

「アサシンとキヤスターはセットだから」

「これで残りは……」

「金色のアーチャーと、ランサーね……」

「アーチャーは受肉してるから……マスターなんていないのかしら？」

「ランサーは高峰ですよね」

凛・シロウ・バゼット。アーチャー・セイバー・ライダー。の5人は話し合いを。さくらは夕飯を作り始め、ヴァッシュは邪魔をしないようにと、それに背を向けイリヤを膝に乗せ、縁側にて一緒にドーナツを食べている。

「ねえガンナー。あなたは作戦会議しなくて良いの？」

「ん？　んん～、良いんじゃないかな？」

「ふーん　ドーナツ貰うわね」

「ん？ うん……何か楽しそうだね？」

「え？ かしら？」

「ん~ 何となくね」

「イリヤちゃん、ヴァッシュュさん。これから夕飯なので食べ過ぎるのはどうぞ……」

「余裕つすよ~、なーはっはっはっはっ~」

「あ~りんの~! 飯なら平氣よ。それ」「ドーナツは別腹よ」

その日の深夜。ガンナーは一人、衛宮の家を後にした。誰に言つてもなく昼夜問わずに動き回る彼を縛るモノは何もなく、単独行動のスキルは彼を自由に行動させていた。

「ほう、イレギュラーのサーヴァント一人で、こんな夜更けに何用かな？」

出かけた先は、言峰教会だつた。

「あんたは聖杯で何を願つんだい？」

オレンジ色のレンズのメガネを、スチャつと掛け、ヴァッシュュは

右手を腰元に添える。

「何も」

「何も？ じゃあ何故マスターとして暗躍している？ 何故彼女の腕を斬り取った？」

「イレギュラーのサーヴァント、ガンナー。私の願いはね、君達が叶えてくれているんだよ」

「……？」

「殺し合い、苦しみ合い、戦い抜いたモノが歪んだ願いを聖杯に願う、聖杯が望まれた歪んだ願いを更に歪めて聞き入れる……愉しいのだよ。ああ、私は満たされる。これ程嬉しい事があるのか？ しかし、ガンナー。君は最初こそ愉しませてくれたが、そこまで平和を望み叶えられてしまうと鬱陶しくもある。ここらで消えて、絶望する仲間の表情を眺めたいモノだ」

「アンタは聖職者じゃないのか？」

それは、ヴァッショの中でも明確な比較対象者が存在していた。孤児院のまねごとをやっていた男。大きな十字架を背負い、何度も不甲斐ない自分を叱咤して来た男だ。タバコを吸う、人を殺すことも多々あった。共に闘うことも、銃を突きつけ合つことだってあった。でも、それでも彼には理由があった。一言で片付けるとしたら『仕方がない』という言葉だろうか。彼も『仕方がないんや、誰かがやらなアカンねん』と口にしていた。勿論、仕方無いなんて言葉で片付けられるものではない。しかし、目の前の男はどうだろうか。その言葉すら適用出来ない。

「聖職者だとも。何人もの人間を救つた。既に知つてゐるかもしけないが、第4回の聖杯戦争はこの冬木で行われた。大火事として処理されたが、その爪痕は酷いものだった。何人も市民が巻き添えをくらい、親と別れることになつた子供も数多くいた」

「やめる……」

ヴァッショは既に知つてゐる。目の前にいる男の黒さを。凛から聞いた情報だと、聖杯戦争に参加してゐた一人だ。凛の父親を救う事は出来なかつたらしいとまでは聞いた。しかし、ヴァッショは更に深くまで読み取つてゐる。いや、自然と分かる事なのかもしれない。しかし、その惨忍さを信じ切れればの話だ。

「痛い、苦しいと呪祖のように叫びのた打ち回る子供を解放してあげたこともある。命を切り離してあげてね」

「ヤメ口！」

目の前の男は自分のマスターであるバゼットの腕を斬り落とした男だ。

前回の聖杯戦争から生きながらえているもう一人のアーチャーのサーヴァントがいる。

前回の聖杯戦争に参加してゐた。

「ランサー」

「よお、また会つたな拳銃使い」

言峰の後ろから現れるように靈体を実体に戻したのはランサーだ

つた。

「やあ、元気だったかい？」

「けつ、食えねえ奴だぜ。じゃあ一丁やるか」

「待てランサー」

「ああ？」

「どうだううか？」

「ふん、良いだう」

足音は更に奥から響いて来た。顔より先に現れたのは声だった。言峰はその男に対し、命令でもお願ひでもなく、どうするかの判断を委ねた。その顔が現れた時、ヴァッシュは確信の顔を浮かべ、ランサーは睨みを利かせた。

「アーチャーのサーヴァント……やつぱり」

「ほう、知っていたか……いや、セイバーとなるほど」

「俺だけじゃ信用ならぬーってわけか言峰

「最速を超える速さで互角だったのだろう?」

「駄犬は下がつていいが良い。我だけで十分だ」

。

（へへ、面白そつな事になつてゐるじゃない ）

教会に新たにやつて來た侵入者がいた。しかし、誰もその事に気づきはしなかつた。

（あなたの全力、見せて貰うわね、ヴァッシュ・ザ・スタンピード）

第10話 「聖職者」（後書き）

感想は隨時受け付中です。

第1-1話 「必殺の不殺」（前書き）

またまた1ヶ月ぶりかね？

死にそなうなんだ。許して欲しい。マジで。

とりあえず退職願を書いたところなんだ。もう提出するかしないかの限界点なんだ。

では、そんな重苦しさを吹っ飛ばして貰いましょうか。

さて、当然ながらOは『H・T』が流れております。

では、行ってみましょうか。

吉峰教会。

静寂を音とする深夜。聖杯戦争と呼ばれる戦いがまた一つ起ころうとしていた。それはいずれもイレギュラーな存在だった。セイバー・ランサー・アーチャー・キャスター・バーサーカー・アサシン・ライダーという7つのクラスに分類され、マスターと呼ばれる魔術師に使役され召喚されるサーヴァント。しかし、この場において尚そこのクラスの分類出来ない双方のサーヴァント。

一方は真紅のコートに身を包み、笄のように逆立てた金髪の優男。オレンジ色のレンズをしたメガネをかけ、右手は既に腰元の銃にかけられ戦闘態勢に入っている。その名をヴァッシュ・ザ・スタンピード。『ガンナー』というどのクラスにも該当しないイレギュラーナ存在だ。

もう一方は金色の甲冑を纏つた金髪の男。こちらも髪を逆立てているが、ヴァッシュとは違い張りつめた空気は醸し出しておらず、余裕というモノが感じられる。サーヴァントとしてのクラスは現在遠坂 凜をマスターに構えるアーチャーと同じクラスを拝命している。二人目のアーチャー。何故2人目が存在するのか。それは、このアーチャーが前回の聖杯戦争から受肉し生き長らえているからに他ならない。数えで言つなれば遠坂のアーチャーこそが2人目とも言える。

ヴァッシュはバーサーカーが消えた時の事を思い出していた。ヴ

アッシュとの戦闘中に割り込んできた田の前の男。無数の剣や槍を繰り出した男だ。普通のサーヴァントやマスターならば、その戦闘スタイルから策を練り、また どこの英靈なのか真名を調べようとするだろ？ しかしヴァッシュにとつて、それは些細な事だつた。

ヴァッシュは銃を抜き取り、銃口はアーチャーの胸に向けていた。そんな行為を見てアーチャーは静かに嘲笑う。ヴァッシュが宝具を使用する動作を見て可笑しくてならなかつたのだ。

「何がおかしい」

オレンジ色のレンズに捉えられているアーチャーは、その沈んだ声に笑いを止め、口元に笑みを浮かべたままに答えた。

「くくく、笑わせるな道化。貴様は我を撃つ気でいるのか？ その様な無粋なモノで殺すとでも言つのか？ あの時、狂つバーサーカーた戦士でさえも助けようとしていたな。言つた筈だぞ、サーヴァントとは既に死人よ。貴様はあの時、バーサーカーをどうしようとしていた？ 助ける？ おこがましい。自分の命が掛かっていながら救あうとしたか？ 何から救あうとした？」

「誰が何と言おうと、僕は誰も殺さない……殺させない！」

ダンツ！

一発の銃声が聞こえ、それがアーチャーの鎧に当たる。殺さないと言つた男の銃弾は人体で言つところの急所を外し、内臓を一切傷付けない様な精密射撃をしていた。もちろん鎧に弾かれアーチャー自身へのダメージはゼロだ。だが、アーチャーはその笑みを止めた。理由は二つだ。

「我的鎧に傷を付けるとはな……」

「この世の全ての宝は自分のモノだと信じて疑わない男は、それに手をかけられ、傷付けられ声を沈めた。それは怒るというには十分な行為だった。それが鎧に深く傷を付けた原因であり、ヴァッシュが本気で殺す気が無いと分かつた瞬間だった。

この行為にアーチャーは憤りを隠せなかつた。これは戦争であり、何度も戦というモノを体験してきた男にとって、不殺は戦士に対する侮辱以外の何物でもないと判断したためだ。

「貴様が何の英靈かなどに興味は無い……だがな、貴様の様な者を生かしておくわけにはいかん……人は人を殺す。これは自然な事だ。人が人である限り、悪は絶対に成る。だから貴様の様な者がいると、我の世界が歪んでしまう」

「そんな事は無い！ どうして分からうとしないんだ！」

「ふん 言峰、貴様の言つとおりだつたな。コイツはつまらん。道化のように演じてゐるわけではなく、そういう風に出来てゐる壊れた人形だ」

奥に控えている言峰は軽く笑い、無言でアーチャーに促す。

壊れた人形は捨ててしまえと。

「天の鎖よ！」

アーチャーの宝具がヴァッシュに絡みつく。首・両手・両足。身動きの取れないヴァッシュの眼に映つたのは真つ赤に染まる門だつ

た。それはアーチャーの宝具『王の財宝』^{ガート・オブ・バビロン}だった。ヴァッシュは一瞬でフラッシュバックする。バーサーカーが叫び消えて行った時を。

「くつーーー！」

その場にいた誰もが思った。確信した。ガンナーというイレギュラーは危険と思われたが、意外とあっさりと幕を閉じた。

「これが王の力だ。身を以つて知るが良い……壊れた人形よ」

パチンッ

発動の合図が聞こえた。それに応えるように無数の武器はガンナーに一直線に飛来する。

「ヴァッシュ！？」

「侵入者がいたか、ランサー」

「ちつ（シュンッ）」

ランサーは言峰に言われるがままに声の主を捕縛しにかかった。

「もう会つこともなかろう。黄泉路で救えるだけ救うがいい。好きなだけな」

カラーン……ガララン……カラーンッ。

鎖を解き、身に纏う鎧を解き、踵を返すアーチャーは、背後から聞こえた音に違和感を覚え立ち止まつた。

無数に刺さつているように見える剣や槍。そして、止んだその雨に。言峰もアーチャーも驚愕していた。どれも刺さつてなどいないのだ。異形の羽の様なモノに防がれるそれらは、音を立てて地面に落ちて行く。

「ふう……」

一筋の汗を流し、ヴァッシュュは鎖で縛られていた腕を擦る。

「何をした貴様……」

「流石にさつきのは防弾のコートでも防げないでしょ？」

それはヴァッシュュの特異能力とでも言つべきプラントの力だった。エンジエルアームとも言われるソレは、完全に武器の切つ先を受け止めていた。盾というなら理解は出来る。しかしその異質な身体から生えた盾は到底、人から生えるものではなかつた。

「壊れた人形風情があ！！」

再び『王の財宝』^{ガート・オブ・バビロン}を展開しようとするアーチャーの行動に、ヴァッシュュは銃弾4発で答えた。右腕・左腕・右足・左足と、的確に瞬時に撃ち抜いた。そう、彼はランサーよりも速く動けるサーヴァントである。宝具の発動など許さんとすれば容易に出来る腕を持つていたのだ。

「圧倒的だな。しかしそこまでだガンナー」

言峰が声をあげる。そして、その横にはランサーと捕えられた少女がいた。

「痛いってば！ 離してよ！」

「イリヤー!? どうして…！」

「だつて、だつてヴァッシュはバーサーカーを守ってくれよつとしだじゃない！ それなら私と再契約してもらおうと思つたんだもん…！ ヴァッシュなら私……！」

そう、ヴァッシュの過去を見終わつた空間で、ヴァッシュを品定めし、この場に侵入してきたのはイリヤスフィールだった。

「全く驚かされる事だ。アーチャーがここまでアッサリとやられるとは……しかしだガンナー。私がどういう人間かも君は分かっているだろ？ ランサー」

「ヤメロー…！」

ランサーは言峰の命令に応えるようにその紅き魔槍を地面に突き立てた。

「ざけんなつ！ そんな命令なら令呪でも使うんだな…！」

「私の言つ事が聞けないと？」

「聞けるか！！」

「では令呪を以つて命令しよう。ランサー

「……」

ドンシ

その銃弾はランサーの槍を吹っ飛ばした。その銃声に言峰は次の句を告げる事は出来ず、そして、最後の銃弾を放つたヴァッシュはスピードローダーで瞬時に弾丸を補充し、その銃口をすぐさま言峰の手に向け撃ち放つた。その数3発。しかし銃声は1つに聞こえた。神速の銃弾は令呪のある手を地面に転がした。

「お前……」

解き放たれたイリヤはヴァッシュに駆け寄り、飛んで抱きついた。

「もつとと、無事だつたかい？」

「助けるのが遅いわよ！」

「うえ！？ 勝手に来ておいてそれはないつしょー……」「

「うん……その……」「めんねヴァッショウ」

イリヤの頭を撫でると、ヴァンシュは蹲るこの教会の神父に声を

かけた。

「ああ、神父！一緒に唱えるんだ！」の世は……」

「！」の世は……？」

「もつと大きい声で……！」の世はあ……」

「！」の世は……！」

「ラーヴ アンド ピースだ！！」

「な……」

彼の不殺の理想はここに成り、帰結へと成った。

かに思えた瞬間。

「……ざけるな……ふざけるな壊れた人形風情が……王に對して
何たる侮辱だ……許さん……！」

「アーチャー……！」

蹲つていたはずのアーチャーは蹲つていた時間を全て回復へと回し、全快とは行かずとも最大の攻撃を放つほどには持ち直していた。サー、ヴァントであるが故の超回復だった。

アーチャーは鎧を一瞬で纏い、髪は逆立つ。そんなアーチャーに

ヴァッシュは再び銃弾を放つ。しかしそれは全てが弾かれる。これが全力のアーチャーということだな。鎧に傷一つ付くことはない。

「ヴァッシュ！ ！ 告げる！ 汝の身は我の下に、我が命運は汝の銃に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら我に従え！ ならばこの命運、汝が銃に預けよう……！」

突然のイリヤによる詠唱にヴァッシュは驚くが、それと同時にどういう内容の詠唱なのかが身体に浸透して行った。これは再契約の詠唱だ。

ヴァッシュはガンナーというクラスだがマスターであるバゼットとの間に令呪という縛りが無い。であるとするならば、バーサーカーを失い、残りの令呪もあるイリヤが再契約の詠唱を唱え、それにヴァッシュが同意したとしたらどういう事になるのか。そして、それは拒否していられる状況じゃないガンナーにとつて1択だった。

「ああーもうつ！ ！ ガンナーの名に懸け誓いを受ける！ イリヤスフィールを主として認める！ 後でマスターに怒られちゃうよ……」

「今は良いから！ ！ ガンナー！ あなたの気持ちは無視しないであげる。令呪を以つて命じる！ 『全力でそのアーチャーを倒しなさい！ ！ もちろん、殺すことなく！ ！ 』 」

令呪によるブースト。その理不尽なまでの急激な魔力量の増加にヴァッシュは驚く。パスが繋がっているだけで令呪が無かつた今までが正常だった彼にとって、本物のマスターを得た事による反動はある意味で大きかった。

目の前のアーチャーが門から奇怪な剣を取りだす。刃が全く無いその剣は円柱が重なり合つて出来ている様なモノだった。しかして馬鹿に出来るものではなく、その威力は放たれる前から異常さを現していた。

「もう何をしても無駄だ。この剣はな、天地開闢以前、星があらゆる生命の存在を許さなかつた原初の姿、地獄そのものだ。それは語り継がれる記憶には無いが、遺伝子に刻まれている！ 消えて詫びろ！！」

「原初の姿……？ 人類最古の英靈……圧倒的な宝具の所持数……」

「あいつはな、ギルガメッシュだ」

マスターを失つた結果、自由となつたランサーの答えにイリヤはやつぱりと納得した。目の前で全てが終わらんとしている最中の出来事である。

ヴァッショは左腰にある銃を手にしていた。今まで自分の銀色の銃だけで戦つてきた彼だが、『全力で』と言われた令呪の縛りがその黒い銃も握らせていた。それは彼と兄弟だった存在のナイブズの銃だった。まっすぐにアーチャーに向けられた2つの銃口は変形して行く。まるで天使の羽のように。それは禍々しく醜く美しい羽だつた。

「天地乖離す開闢の星……！」

エヌマ・エリシュ

「くつ……ぐうう……！……！」

ぶつかり合うアーチャーの全力による宝具とヴァッショの2丁拳

銃によるエンジェル・アームという人ならざる者の宝具。その光は教会を崩壊させた。

いずれも必殺の宝具。更にガンナーの方は令呪のブーストもある強力なモノだ。その威力はアーチャーのそれを凌駕し、かつて月を穿ち、街を灰に変えた悪魔の業。その光に押し潰されるようにアーチャーは飲まれた。必殺の一撃。必ず殺す業。しかし令呪の効力は『殺す事なく』と付け加えられた命令だ。そんな事が叶うわけがない。しかし、それを成し得てこそそのヴァッシュ・ザ・スタンピード。不殺の男である。

「あばばばばばば……私の教会が……」

「言峰が壊れてやがる……」

「ありがとうランサー。紳士的な人は好きよ」

瓦礫の中からランサーが起き上がると、その腕の中にはイリヤの姿もあった。そして、戦っていたサー・ヴァントはといつと……。

生きてはいるが活きてはいないアーチャーと、そんなアーチャーに肩を貸すようにイリヤの方に歩いて来るガンナーの姿があった。

「無理な命令だつたけど生きてるわよね?」

「うん。助かつたよ。全力で殺さずなんて……令呪つて凄いね」

ヴァッシュは笑つて答えた。

「それで？ ビーフするのソレ？.」

「連れて帰るや。君も来るだろ？」

「あ？ 僕か？ 僕は静かに消えるのを待つわ

カチリ

「来るだろ？」

「てめえ何で銃向けてんだよ！？ いつも以上に撃つ気満々じゃねーか！！」

「良いから良いから

「ただいまー」

「ああ、今日は一段と早いなガンナー。まだゾーナッシュ屋は開いてないだ……う？ うわああああー！ セイバーー！」

「ビーフしましたシロウー！ なつ！？ ランサーニアーチャーー！？

「最終決戦は！」ですか！？ セイバードがつてー！」

「あーおはよーライダーちゃん」

「何よひぬといわね……つ……すぐ着替えてくるわ……」

「朝弱いね凛ちやんは……せ」

「……ふむ……説明を頼めるかランサー」

「コマイツの仲間で大変だなお前ら……まあ昨日の深夜にコマイツが来
やがつてよお」

「…………あなたは…………何をやつていろんですか……」（ギュギュ…

…）

「『めんなさい！』『めんなさい…』

早朝にして聖杯戦争会議が行われ、ヴァッシュはとりあえずバゼ
ットに呪わされ、バゼットはランサーと再契約を結び、金ぴかのア
ーチャーは保有スキル、黄金律を衛宮家の家計に充てられる流れにな
なった。

「イリヤはまた戦う気なの？ ガンナーを使役して

「安心して凜。私を護ってくれるサーヴァントが欲しかつただけよ

「とりあえず、これで聖杯戦争終了かな？」

「作戦会議したらもうすでに決着がついてたなんて……でもこれか

「うん……聖杯を破壊して終わりにしてみる」

「聖杯を破壊つて……聖杯がないじゃなー」

「うん……聖杯なりすぐここでも用意できるからや」

ヴァンシュは空っぽの笑顔でいつもよつもゆつとビューナッシュに手を付けた。セイバーはその時何故かドーナッシュに手を伸ばす事が出来なかつた。

感想は隨時受付中。

イメージでは一度倒れたギル様が再度挑んでくるのは完全に嘘ませ犬的な展開で最初は書いていたので、少し変な事に。でも嘘ませ犬というか、ボケを言峰に担当してもらったので、まあ納まつた力ナ？ と言つたところ。

令呪による絶対的な命令は殺すな。でも全力で倒せ。といつ無茶苦茶な願いも叶えてしまう。でもソレはヴァンシュに不殺が備わっているからに他ならない。と、勝手に思つてみる。

ふむ、そろそろ締め時かな？ って感じのラストでしたね。では、次回なのかは不明ですがそろそろラストです。

的なネ。そんな感じは嬉しいね。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425q/>

Fate/Love & Peace

2011年11月3日11時16分発行